空のカケラ

中花田　庸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空のカケラ

【Ｎコード】
Ｎ９８３２Ｉ

【作者名】
中花田　庸

【あらすじ】
２０３８年。枯渇した天然資源を巡って、世界は再び二分された。
世界中でテロや紛争が巻き起こり、世界経済は深刻な事態に陥った。
荒れ果て、戦場と化したかつての首都、東京。
今となっては日常と化した戦場で、兵士は空爆に巻き込まれる。

兵士が爆風の先に見たものは…遥か昔の東京。江戸の空だった。

戦を知らぬ武士と、平和を知らない兵士。

彼らの出会いは偶然か必然か。

プロローグ　戦場にて（前書き）

つたない文章ですが、お付き合いいただければ幸いです。

プロローグ　戦場にて

Ａ．Ｄ．２０３８　１５：３５

荒廃した市街地に、断続的な銃声と爆音が響いている。

何台もの装甲車が瓦礫を弾き飛ばしながら、荒れ果てたアスファルトの上を疾駆する。

上空から飛行型無人兵器が爆弾を投下し、直撃を受けたビルが跡形も無く崩れ落ちた。

――――南北軍事的占領ライン――――

かつての日本の首都・東京都千代田区と呼ばれた場所。

２０１６年、過剰な採掘により世界中の天然資源が高騰し、１９７０年代のオイルショックとは比べ物にならないほどに世界経済は大混乱となった。経済学者たちはこれを「エネルギーショック」と呼んだ。

天然資源を輸入に頼るしかなかった国の経済は当然のごとく混乱した。資源の生産国は自国のエネルギーを確保することに手一杯で、やがて輸出をストップせざるを得なくなった。

そのエネルギーショックの1年前、日本では関東地方、主に東京、千葉、茨城での広範囲にわたって直下型の大地震が起こり、死傷者15万人を超える甚大な被害をもたらした。

それにより、日本の中枢は機能をほぼ停止しかけたが、国連の協力を経て、復興は順調かと思った矢先、このエネルギーショックが起こった。

各国は日本の復興支援から手を引き、国内の経済状態は悪化の一途をたどった。失業者が溢れ、犯罪率は急激に上昇した。

国力を維持できなくなった日本国政府は、最後の手段に出る。それは「国を売る」という最悪の選択だった。

それ以降、世界地図から日本国の名は消えた。

その数年後、枯渇した天然資源をめぐって、世界中で紛争が巻き起こった。

『撤退しろ！もたもたするな！』

『グレネード！！伏せろ！』

『ちくしょう！弾が切れた！』

『そいつはもう死んでる。置いていけ！』

崩れかけた国会議事堂の大ホール内に、１５人ほどの兵士たちがいた。彼らは銃の掃除をしたり、仮眠を取ったりとそれぞれが思い思いの行動をしていた。バラクラバやゴーグルで表情や性別は伺えないが、野戦服やブーツは泥や埃に塗れ、皆ひどく疲弊している。それだけ今の戦況が悪化しているのがうかがえた。

中央の議長席に置いた無線から聞こえる音声は、苦戦する味方の救援要請と銃声、爆音、人間の断末魔のみだった。

司令部からの無線連絡が途絶えてから3日経った。

何度も通信を試みたが、応答はなく、耳障りなノイズが流れるだけだった。

彼らは、見捨てられたことを悟った。

「ここも、もう潮時だな。」

中央付近で、バラクラバの口元を捲り上げ、タバコを吸っていた兵士がふと、呟いた。

「そうですね。こちらの食料と弾薬ももう2日と持たない。このま

まだと撃たれて死ぬか、飢え死ぬかですよ。司令部のクソ共、ろくに装備も食料も出しやがらなかった。所詮うちらは消耗品でしかないってことですかね。」

隣でライフルの掃除をしていた兵士がぼやく。

「あーあ。腹減ったなー。もう缶詰は食いたくねえ…ギョーザ定食が食いてぇ…なあクロ。」

「生きて帰れたら、たらふく食ってくださいよ…私だって葱チャーシュー食いたいです。」

クロと呼ばれた兵士がポケットを探りながら呆れたように答えた。

「あれ～タバコがみつかんねぇ。大尉。１本くださいよ。」

「ふざけんなよこのやろう。あー腹減った。」

「あんま腹減った言わんでください。よけい腹減ります。」

『ホークアイからブラックベア！』

唐突に、通信用無線機から緊迫した声が響いた。気だるげだった雰囲気は、一転して緊張感をはらんだものになった。

タバコを吸っていた兵士が即座に応答した。

「こちらブラックベア。どうした。」

『南東から敵勢力だ！くそったれ！２００はいる！ＡＰＣもいやが

る！』

「了解だ、ホークアイ。直ちにそこを放棄し、ＥＲＶ（緊急合流地点）まで移動しろ。死ぬんじゃないぞ。」

『了解！以上ホークアイ！』

「全員…状況は分っているな。」

静まり返った議事堂内に、静かに、だが厳しい声が響く。

張り詰めた雰囲気がいかに深刻な事態かを物語っていた。

「現時点を持って、我々第０８小隊は国会議事堂を放棄し撤退する。各員装備の点検を怠るなよ。絶対に生き残れ。生きて帰るぞ。」

先程まで疲労と不安に包まれていた兵士達が、その一言で、何かに取り憑かれたかのようにせわしなく動き出した。

・・・・十分後。

兵士達は議事堂入り口に集合した。

「さあ、行こうか野郎共。遅れたらケツを月まで蹴っ飛ばすぞ！」

一斉に、しかし一切の乱れもなく兵士達は隊列を組み、進む。

敵の激しい攻撃をかわしつつ、彼らは走り続けた。

「やべぇ！弾切れだ！」

「奴等の装備を奪え！それしかな…何だ！」

大通りに出ようとした途端、爆発音が響いた。全員がその場に伏せる。

『１０時の方向に敵勢力！くそっ！ＡＰＣだ！』

「交戦は最小限にしろ！こっちの身が持たん！！」

「建物の影に隠れろ！」

それぞれが近くのビルの影に避難したそのときだった。

「なんだ…？あれは・・・・？隊長！！」

一人の兵士が、遥か上空を飛ぶ異様なものに気づいた。

「ありゃあＢ－２か？航空支援なんぞ聞いてないぞ！」

「何でこんなところに！」

「まさか…この区域ごと吹っ飛ばす気か…！ふざけやがって！」

「総員！！退避！！退避しろ！」

その命令に全員が反応した時、Ｂ－２爆撃機から何かが投下された。

その瞬間、世界が白い光に包まれた・・・・。

プロローグ　戦場にて（後書き）

初めての小説なので、お見苦しいところもあると思いますが、よろしくお願いします。

奇妙な夢

・・・・私は・・死んだのか・・・・？

…皆は・・無事なのか・・・・？

…体が動かねぇ…何にも聞こえない…あっけないな…死ぬときは…

…すまない。雪人(ゆきと)。

そして、白い世界は漆黒の闇に変わっていった。

（水の音がする…。音？）

目を開けた。見える。そのままで周囲を確認する。ひどく暗い。星空の中、頭上を明るい光が照らしている。

（月…？夜…なのか…？）

とりあえず、月明かりから隠れるように、近くの木の陰へ這いながら移動する。

そしてそのまま聴覚に全神経を研ぎ澄ませる。

（銃声は聞こえないな…不気味なくらい静かだ。）

この場は安全と判断し、体を起こそうとした時、肩に激痛が走った。肩には爆発の際に飛んできたのか、手のひらぐらいの金属片が刺さっていた。

「くそっっっ！」

悪態をついて、痛みに耐えながら金属片を抜いた。途端に血が噴き出す。

止血帯で止血をしてから、立ち上がり、周囲を見渡した。

5メートルほど離れた所にライフルが飛ばされていた。

鬱蒼と生い茂った木々や蔦、そして夜の闇が奥へ奥へと誘う様に広がっていた。

「森の中？これは夢か？」

自分のいた場所は荒廃した市街地だった。ブリーフィングで確認した時にも半径１０キロ圏内に森などまったくないはずだ。

だが、肩の傷の痛みが、夢ではないことを物語っていた。

（皆は無事だろうか・・・。合流できればいいが。）

兵士は自分の装備と、ライフルが正常に動作するかを確認し、ライトを点け、水の音がする方向へ慎重に歩き始めた。

（…何かがおかしい。）

もう３０分は歩いていると思うが、周りには人工物も何もない。

（ヘリの音や爆音が聞こえてもいいはずだ。）

兵士は、時計を確かめた。支給された防水仕様のデジタル時計だ。時計機能と放射線を計測するガイガーカウンタの機能も備わってい

た。

（なんだ・・・これ・・・）

時計の文字盤には（８８：８８）と表示されていた。

進むうちに、大きな川辺に着いた。

（下流に進めば、人家くらいあるだろう。）

危険ではあるが、現在地も分からない今はそうするしかない。

だが、全くと言っていいほど敵の気配はなく、夜の川辺は静まり返っていた。

御家人　安藤勇志郎（前書き）

色々矛盾してますが、生暖かい目で見てやってください。

御家人　安藤勇志郎

（遅くなってしまったな・・・急がなければ・・）

戌の刻を告げる鐘が鳴った。満月が煌々と光る中、人気の無い畦道を一人の男が早足で歩いている。

安藤勇志郎は家路を急いでいた。小普請組の御家人だが、家は決して裕福とは言えず、大黒柱だった父・宗三郎が昨年の春に亡くなってからは、禄を減らされ、仕官もままならなかった。家には母と今年十三歳になる弟が待っているが、とても今の禄で家族三人が食べていくことはできなかった。

今日も口入れ屋で探してきた荷運びの仕事を終えたところだったのだが、今日の仕事はいつもと違った。
いつもの荷揚げの仕事は昼間、人足に混ざって廻船問屋の積荷を運んだりするのだが、今日は夕方から夜間にかけて行われた。口入先の人間も詳細は一切明かさず、黙って人足達の仕事を監視していた。仕事が終わった後は相場より大分大目の報酬を全員が受け取った。ほかの者はずいぶんと喜んでいたが、勇志郎だけが薄気味悪さを覚えていた。

『今日はなかなか実入りのいい仕事だったが…なんだか気味が悪かったな。もうこのような仕事はすまい。…このような人足仕事ばかり続けておると母上は煩いからな。』

懐に手をやり、心の中でぼやく。天明の大飢饉以降、米の値が上がり続けている。最近また値が上がった、田沼様の世になってからろくな事がない。と、母のせつがぶつぶつ言っていた。

勇志郎は不意に足を止め、冴え冴えと輝く満月を見上げた。

『わしにもう少し力があれば、母上と孝之助にも楽をさせてやれるんだがな・・・』

月に願っても仕方がないと前を向き、踏み出したその時、後方の異変に気づいた。

何気なく後ろを見ると、3人の男が、こちらへ歩いてくる。

明らかに勇志郎を見ている。腰には大刀を一本落し差にしている。浪人のようだった。

『夜盗か？まずいな、番屋もこの辺にはないぞ…』

辺りに人気はない。町まではまだ距離があった。

その時、３人組が勇志郎に向かって走ってきた。

『まずい！』

勇志郎も走り出した。

武士の体面で、刀を差してはいるが、真剣など生まれてから一度も抜いたことはない。昔から争いごとは大の苦手だった。

もう少しで、町に入るというところで、前方に抜き身の刀を下げた別の２人組が現れた。

追ってくる浪人の仲間だろう。後ろの浪人が「その男じゃ！捕らえろ！」

と叫んだとき、前方の２人が向かってきた。

『何だというのだ！』

勇志郎はあわてて山に向かう脇道に走り出した。

奇妙な夢２

兵士は下流を目指して歩いていた。

そばを流れる川もだんだん広くなっている。もうすぐ山から抜け出せるだろう。

（それにしても、ここはどこだ？）

持っている通信機器やＧＰＳも道中試してみたが、どれもエリア外と表示されるだけで、お手上げだった。

（衛星でも感知できないなんて、どんな秘境なんだよ。）

心の中で毒づいたが、状況は変わらない。

その時、遠くで何かが聞こえた。

反射的にライフルを構え、近接戦闘に持ち込んでもいいようナイフも抜いた。瞬時に戦闘体勢に入る。

全神経を集中させ、素早く、しかし慎重に音がしたほうに向かい歩き出した。まるで豹や虎が獲物を狙うときの様に、足音も立てずに近づいていく。

よく聞いたら、複数の人間の声のようだ、随分と切迫している。

（何だ…？敵か…？）

目の前の茂みから銃口を突き出し、ライフルのスコープで向こう側を確認した。

川の向こう岸で、数人が1人を囲んでいる。明らかに危害を加えようとしているのが見て取れた。
彼らの手には細長い剣のようなものが握られ、哀れな獲物を屠ろうと冷ややかに輝いている。

囲まれている男も懸命に剣を構えているが、顔は緊張と恐怖で引きつり、体は震えていた。

（現地人か？…随分と古臭い格好だな。しかもあんな剣なんてどこで調達したんだ？普通銃かナイフだろ。）

大抵のゲリラや民兵ならば、軍の放出品や戦場で拾ってきた装備などで身を固めている。

彼らと共に戦ったことも、殺し合ったこともある兵士はそれをよく知っていた。

あまり無関係の争いに介入するのは気が引けたが、周りには何もないし、誰もいない。

（現在位置を知る必要があるな。どちらに味方しようか？）

その時、男の後ろにいた強盗が斬りかからんと刀を振り上げた。

兵士は迷うことなくトリガーを引いた。

遡逆

勇志郎は全速力で山に向かって走っていた。

だが、混乱して自分から袋の鼠になっていることに気づいていなかった。

後ろから5人が追いかけてくる。恐怖で足がもつれそうになった。

（わしが何をしたというのだ！）

道が途切れ、川辺に出た。足を踏み出した瞬間、走る背に衝撃を受け、派手に転んだ。

握り拳大の石が当たったのだ。後ろの男たちが投げたのだろう。

慌てて起きようとしたが、時すでに遅かった。

「武士の癖に随分と逃げ足が速いのう。手間どらせおって。」

1人の浪人体の武士が立ちふさがった。その後に続々と仲間が追いついてきた。

「…銭なら持っておりませんよ。」

足の痛みで多少ふらつきながら勇志郎は起き上がり、目の前の男を見据えて気丈に振舞う。若干声が震えた。

「ふん、おぬしのなりを見ればそれくらい分かるわ。」

深編み笠をかぶった浪人が小馬鹿にするように言った。

「それでは私を襲う理由などないでしょう。すべて忘れますゆえ、私を帰してください。」

勇志郎は震えそうになる自分を叱咤しながら眼前の男を睨み付ける。

「先刻、荷運びの仕事をしていたであろう。その時からおぬしを監視していた。」

「…」

なぜそのような事をするのか皆目見当が付かなかった。唯仕事をして、賃金をもらっただけだ。恨みを買うような事をした覚えも無い。

「おぬしはその荷の中身を見たか？」

唐突に男が聞いた。勇志郎には意味が分からなかった。

「は？私は何も見ていません。そんなことを聞くために私を追い掛け回したのか！」

怒りがこみ上げ、勇志郎は自分でも驚くような声で問い詰めた。

「ではこう聞こう。あの荷はどこに運ばれると聞いた？」

「私は何も知りません！もう帰してくれ！」

そう叫んだ瞬間、深編み笠の男の気配が変わった。

周りの温度が少し低くなったような感じがした。

「そうか…ならばもう用はない。」

男は低い声で言いながら、刀を抜いた。刀身がぬらりと月明かりに光った。

「なっ！！！」

命の危機を感じ、勇志郎は刀を抜いた。武士である以上刀は携えていたが、真剣を抜く事など生まれて初めてだった。

男達は刀を構え勇志郎を囲んだ。いずれも手馴れている。かなりの遣い手のようだった。

（これまでか・・・すまぬ母上、孝之助）

諦め掛けたその時…

パン！！！！

静かな川辺に乾いた発砲音が響いた。不意に後ろの男が崩れ落ちた。

パン！パン！パン！

立て続けて3回響いた。脇にいた2人がどう、と倒れ、一人が足を押さえてうめいている。

勇志郎や男達には何が起こったのか分からなかった。ただただ目の前で起こっていることが恐ろしかった。

「何じゃ！」

その時、発砲音とともに深編み笠の男の足元の地面が爆ぜた。

「くっ！鉄砲か！退くぞ！」

足を撃たれた仲間に手を貸し、夜の闇に消えていった。

「な、なんだったのだ・・・」

勇志郎はへたりと腰を下ろした。恐ろしさで足に力が入らなかった。

「こ、これは悪い夢なのではないのか？」

だが、恐る恐る振り返れば、先程自分を襲ってきた男が、物言わぬ屍となって転がっていた。

「うっ…」

勇志郎は吐き気を感じ、目を背けた。過去の忌まわしい記憶が蘇る。

崩れ落ちる背中。飛び散る赤。赤。白い刃。

汗が噴出す。世界が回る。目をきつく瞑り、吐き気と眩暈をやり過ごす。それは時が経つにつれ、落ち着いてきた。

安堵したのもつかの間、川の向こう岸からバシャバシャと歩いてくる人影を見つけた。

「ま、また夜盗か！」

力の抜けた足を叱咤するが、後ろへずり下がるだけでまったく言うことを聞かない。

人影はどんどん近づいてくる。

（何だ・・・あれは・・・？鬼か？）

異様な姿だった。勇志郎にはこの世の者とは思えなかった。

月の光に照らされたその異形の者は、夜の闇からそのまま滲み出てきたような漆黒の色と、見たことも無い金属の筒の様な物を手にしていた。手にした筒の先からは薄く白い煙がでていた。

顔は体と同じ色の鉄兜と面頬のようなものに覆われて見ることができない。

（あれは鬼かも知れん！）

勇志郎は恐ろしさで身が竦んだ。今度こそ殺されてしまうと思い、震える手で刀の柄を握り締めた。

――――――――――――――――

（チッ、2人逃がしたか。肩の傷がなければ仕留められたのに。）

兵士はスコープを覗き込んだまま、少し様子を見た。銃の反動で肩の傷が痛んだが、兵士はそれを無視した。

強盗共は完全に逃げたようだ。

（さて、行くか。）

茂みを掻き分け、ブーツが濡れるのもかまわずにバシャバシャと川の浅瀬を渡った。

兵士が助けた男は、まだ腰を抜かしているようだ。異様な格好だった。薄いガウンのような着衣に長いスカートのようなズボンを履いている。スコットランドの民族衣装に似ていると思ったが、よく見るとまったく違う。

昔、時代劇という旧日本のドラマを基地の衛星チャンネルで見た事があった。それに出てきたサムライの格好によく似ている。こちらの方がはるかに地味で汚い格好だが。

（なんだ、こいつの格好。コスプレか？）

相手もこちらに気づいたようだ。驚愕に目を見開き、剣を再度構えた。細長い切っ先を明良に向けようとしてはいるが、力が入らないらしく、剣先が定まらず震えている。

剣の他に武装は無いように見えたが、油断はできない。攻撃された時を考え、トリガーには指を掛けたままにした。

そして、怯える男に兵士は声をかけた。

――――――――――――――――

『動くな。武器から手を離して、両手を上げろ。』

鬼の口から聞いたことのない言葉が発せられた。わけも分らず、勇志郎は震える事しか出来なかった。

その態度に苛立った兵士は『クソッタレ！通じねぇのかよ』などと毒づきながら、もう一度怒鳴った。

「おい！聞こえないのか！武器から手を離せ！」

その一喝に勇志郎の体がびくりとはね、刀から手が離れた。今度は勇志郎にも理解できた。

「よーし。いい子だ。そんなビビんなくても取って喰いやしねぇよ。」

そう言うと銃口を下に向け、勇志郎に手を差し伸べた。

震える手が、ごつごつしたグローブの手を恐る恐る掴んだ。

「大丈夫か？怪我はないな。」

やっとのことで立ち上がった勇志郎が身なりを整えていると、鬼の口から意外な言葉が発せられた。

「へ？あ、あ…大丈夫です…」

「あいつらとは知り合いなのか？」

「いいえ、名も知りません。いきなり追いかけてきたと思ったら…」

「だろうな。聞いてみただけだ。殺しちまった後で自分の知り合いでしたなんて言われたら面倒臭いんでな。」

「え…？では、あなたが助けてくれたのですか？」

間の抜けた返事に兵士は少し笑いながら答えた。

「ああそうさ。2人には逃げられちまったが、命は助かったんだからまあいいだろ。災難だったな。」

勇志郎は、目の前の恐ろしい鬼が自分を助けてくれたのだと理解した。

「助けていただいたこと、誠に感謝いたします。無役ゆえ、大した供物は出せませぬが、どうか、命だけは勘弁していただけませぬか？」

「は？」

今度は兵士のほうが間の抜けた声を出した。

「あっはははは！なるほどね。私を鬼だと思ったわけか。サイコーだ。」

「あまり、笑わないで下され…」

ずっと鬼か天狗かと思っていたことを正直に話すと、案の定爆笑され、勇志郎は穴があったら入りたい衝動に駆られた。

「一応、ちゃんとした人間だぜ。マントをつけても空は飛べねぇしな。まぁ、そんなことはいいんだ。」

兵士は、当初の目的であった電話と出来れば、移動の手段として車があれば貸してほしい旨を告げた。

だが、返ってきた答えは兵士の想定の斜め上をいっていた。

「でんわ？くるま？とはなんでござろうか？」

「はあ？電話だよ。で・ん・わ！あんた持ってないのか？」

「持ち合わせてはいない…申し訳ござらぬ。」

イラついた様な兵士の問いに勇志郎は少し気圧された様に答えた。

「ジーザス！参ったな、基地に帰れない…通信機器も使えないし。最悪だ。」

兵士は肩を落とした。

根っからのお人好しの勇志郎は、その様子を見て少し気の毒に思えた。

「何かお困りのようですな……ああ、失礼いたした。まだ名乗っておりませんでしたな。私は、御家人の安藤勇志郎と申します。住まいは神田明神近くの拝領屋敷です。」

「（ゴケニン？）黒崎明良だ。対露共同陸軍第１２旅団東部方面独立支援部隊所属で階級は少尉だ。まあ雇われ兵士だから傭兵と同じみたいなもんだがね。」

「たい・・・？どこかのご家中の方ですか？」

明良は会話の流れに違和感を覚えた。話が噛み合っていない。
自分の話も通じていないが、安藤と名乗った男の話し方もなんだか
おかしい。

「ゴカチュウって何よ。何意味判んない事言ってんだよ。今は戦争
中だぞ？それとも兵士を見た事がないのか？」

「せんそう？戦の事ですか？今は徳川様の世ですよ。戦は大阪の陣
以降ありませぬぞ。」

「は？！おい！今何て言った？！」

突然素っ頓狂な声を上げた明良に勇四郎は驚いた。

「どうなされたのだ？黒崎殿？」

なにやらぶつぶつと独り言を言っている。

「今は何年だ。」

唐突に明良が聞いた。

「は？今は天明４年ですが。」

明良は凍りついた。

明良は空を仰いだ。間違いだ。何かの間違いだ。

こんなクソッタレなことがあってたまるか！

「もうひとつ聞くが、ここは旧東京だよな。」

「え？ここは江戸だが。一体どうされたのだ？」

嫌な予感は的中した。

明良はやっと自分がどこにいるか分かった。

（神様！居るんだったらこのケツを月まで蹴っ飛ばしてくれ！）

邂逅（後書き）

部隊名とか超適当です。

夢と現実と

（なんてこった！そんな事があってたまるか！）

明良は途方に暮れていた。安藤なる人物の言う事が本当なら、自分のいた所から時代を超えてしまったのだ。信じられないことだが。

あの爆発のせいだろうか。皆目見当もつかない。

（電話を知らない時点でおかしいと思ったんだ…）

傍では所在無さげに安藤勇志郎が明良を見ている。余りの明良の狼狽を見て、声を掛けづらかったようだ。

「何か・・・事情がおありのようですな」

（だが、こいつの言うことが本当だという証拠も無い。ただの虚言癖かもしれない。
ずっと続く戦争で精神がやられても不思議じゃない。）

明良はそう自分に言い聞かせた。

「まあ、自分の目で確かめないと納得できないからな。よし。安藤さん、近くの町まで案内してくれないか？」

「では、私の家に行きましょう。そこでなら落ち着いて話もできるでしょう。」

「助かるよ。ありがとう。」

二人は勇志郎の家へ向かって歩き出した。

「なあ、安藤さん、私と同じような格好をしているやつらを他にも見なかったか？」

「いいえ？誰も。黒崎殿のような方が他にもいれば江戸は大騒ぎになりましょうぞ。」

「…そうか。」

明良の声音が沈んだ。仲間たちの安否が気がかりだった。

（そう簡単に死ぬような奴等じゃねえ。）

もしも、この安藤という男が敵方のスパイだとしたら、この男にどんな手段を使ってでも仲間の消息を聞き出そう。そんな物騒なことを考えていると、勇志郎の視線を感じた。

「ときに黒崎殿、その種子島のような物であの浪人どもを撃ったのですか。」

ふいに勇志郎がライフルを見ながら言った。

「ＳＰＲ　Ｍｋ１２だ。古いモデルだが、何度もこいつに助けられた。私の一部さ。」

「えす・・・よく分からぬが、すごい物だな。」

「私もカタナっていうの初めて見たよ。腕のほうはどうなんだい？」

「恥ずかしながら、からっきしで・・・」

「あのへっぴり腰じゃあな。」

そういって二人は笑った。

しばらく歩いたとき、明良は眩暈に襲われた。

（しまった。血が流れすぎたか・・・）

肩の傷が思ったよりひどい様だ。止血はしてあるので大丈夫かと高をくくっていたが、甘かった。

それに、東京の戦闘区域にいた1ヶ月間ほとんど寝ていなかったのだ。いや、仮眠はとっていたが銃声や物音がすれば飛び起きて、戦闘の態勢に入る。戦場にいる間はずっとそうしてきた。

だが、明良の体力は限界だった。

「黒崎殿！どうなされた！」

（まずい・・・）

突然倒れた明良に勇志郎は駆け寄った。

「しっかりなされよ！黒崎殿！」

それきり、明良の意識は途切れた。

――――――――――――――――

突然後ろを歩いていた明良が倒れ、勇四郎は慌てた。

「黒崎殿！どうなされた！」

呼びかけても反応がない。胸は上下しているので、気を失っているだけのようだ。

抱き起こそうとすると、右肩が濡れている。血だった。

「怪我をしていたのか…それにもかかわらず私を救ってくれたのだな…」

勇志郎は明良を担ぎ、家路を急いだ。

はじめは、明良の事を鬼か物の怪だと思っていた。見た事のない装束と恐ろしい武器を持っていたのだから。

明良に対する疑問は尽きる事がなかったが、今はこの命の恩人を救う事だけを考えていた。

（黒崎殿…死なないでくれ）

夢と現実と2

チヌークのローター音、装甲車の凶暴なエンジン音、銃声、爆発音、人の悲鳴。

『シエラ2！カバーしろ！』

『うるせぇ！弾がねぇんだよ！』

無線がひっきりなしに鳴る。もはや怒声に変わっている。

銃弾の雨が容赦なく降り注ぐ。

見慣れてきたいつもの日常。

いつもの戦場。

子供の頃から銃を持ち、戦ってきた。

そうしないと、生きていけなかった。

だから。銃を手にした。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「もう少しですぞ！黒崎殿！」

月の下を安藤勇志郎が腰をふらつかせながら、明良を担いで必死に歩いている。

安藤家は神田明神近くの拝領屋敷だ。

家に着いたら医者を呼ばなければ。と、門に近づいたとき、

「兄上！」

「勇志郎！遅かったではありませぬか！何をしていたのです！」

心配した母のせつと弟の孝之助が待っていた。思ったとおり母の機嫌はよろしくないようだ。

「母上！お説教なら後ほどたっぷりと聞きます故、医者を早う呼んで下され！」

せつは、勇志郎が担いできた明良を見て目をむいた。

「この者は何者ですか！なんと面妖な格好か！鬼か天狗かも知れぬ。早う離れなされ！」

「母上、この方は私の命の恩人です！夜盗に襲われていた私を救ってくれたのですぞ！それにひどい怪我をしているのです。手当てをせぬと死んでしまう！お願いします！」

勇志郎の必死の懇願に、せつはしばし険しい顔で思案した後、明良と勇志郎を交互に見て、

「孝之助、順庵先生をお連れしなさい。」

「はい！」

「母上！」

「勇志郎。何時まで其処にいるつもりですか。早う入りなされ。」

勇志郎は安堵の溜息をつくと、我が家に入った。

夢と現実と2（後書き）

もうなんかグダグダですいません。

夢と現実と3

（どうしたものか・・・）

勇志郎は思案していた。

目の前には母のせつが敷いてくれた夜具の上に、気を失っている明良が横たわっている。

勇志郎はその脇で正座をしたままうんうんと悩んでいる。

（どうやって脱がせればよかろうか）

明良は米軍から支給された野戦服の上に防弾プロテクタを装備していた。しかもまだヘルメットとマスクをつけたままだった。

（とりあえず、あの種子島と背負っていた荷は天袋に片付けたが…）

せつは湯を沸かして来るといって台所に引っ込んでしまった。

（なんとも奇妙な鎧に装束だ。）

「――――っ」

明良が苦しげに何かつぶやいた。

「ど、どうなされた！傷が痛むのですか！もうすぐ医者が…」

「――――は…やく…い…ろ」

「何ですか？何か…」

「…作戦は……中止だ…早く…撤退するんだ…」

悪い夢を見ているのだろう。うなされているようだ。

（よし！兜より先にこの鎧だ。）

逡巡している暇はなさそうだと、意を決して明良の衣服に手を掛けた。

――――――――――――

銃声が聞こえる…

明良は銃を手に砲撃の中を駆けている。足元は泥濘が酷く時折足を取られた。

隣を駆けていた仲間の足を機銃が吹き飛ばした。絶叫を上げて泥の中に倒れこんだ。

「うわぁあああああ！！！あああああああ！！！」

「格納庫は！どこだ！」

「囲まれているぞ！くそっ！奴等最初から分かってたんだ！この作戦を！」

「母さん！助けて！助けて！」

兵士達の声はまだあどけなかった。

（ああ、これは最初に派兵された、ボスニアだ…）

初めに所属したのは、兵役を志願した少年兵の一隊だった。少年兵は2年ほどの訓練を経て実戦投入されていく。

ほとんどが戦災孤児や貧しい子ども達だ。一回の戦闘で彼らにとっては多いほどの賃金がもらえ、食事も与えられた。

それに惹かれて志願した少年兵は多かった。

大人たちはそんな彼らを戦争に利用した。

実戦経験もない少年兵たちがこの過酷な戦場で生き残るのは至難の業だ。一回の作戦で戦死する者も少なくなかった。

運よく生き残っても、戦場しか知らない彼らは戦場で生きるしか術は無かった。

明良は今も戦場で生きている。そして戦場で死ぬだろう。そう思っていた。

だが…

―――――――――――――――

勇志郎は四苦八苦しながらプロテクタと野戦服に格闘していた。脱がせないと治療ができない。

（なんと複雑なつくりだ。本当にどこから来たのだろうか。）

色々と想像しながら、プロテクタを何とかはずし、襟に手をかけた。

何とか釦をはずす。

（おや？）

奇妙な感じがした。現れた細い首は少年というより女のそれだった。

（な、何と！）

釦をすべて外し終えて、驚愕した。

（女子だったのか！）

モスグリーンのタンクトップの下には女性の胸のふくらみがあった。

明良を男と思い込んでいたばかりに動揺は激しい。意識したらどんどん顔が赤くなってきた。

たまらず、台所に居るだろう母を呼んだ。

「母上！来てくだされ！」

勇志郎はあまり女に免疫が無かった。
顔が赤く火照っていた。

「何ですか騒々しい。ご近所にご迷惑ですよ。」

せつが何事かと戻ってきた。
慌てる息子の姿と半分衣服を脱がされた明良を見て、瞬時に状況を理解した。

「勇志郎！落ち着きなされ！」

せつが一喝すると勇志郎はピシッと正座をした。幼いころからの躾の賜物だ。

「武士のそなたがその体たらくでどうしますか！この方は命の恩人なのでしょう！そなたが慌てていてどうします！」

「はっ！はい！」

「まあ、おなごの着物をおのこのそなたが脱がせるのもなんでしょう。後は母がやります故、そなたは背を向けていなされ。」

「はい…」

勇志郎は情けない返事をして明良の体から目をそむけた。

夢と現実と４

安藤家の一室では、母のせつが明良の野戦服を手際よく脱がせてゆく。

勇志郎は未だ居心地悪そうに背を向けていた。

「勇志郎。」

背中越しにせつが声をかけた。

「なぜ帰りが遅くなったか聞いていませんでしたね。」

「それが…」

勇志郎は荷運びの仕事の後、浪人に追われ斬り捨てられそうになったこと、明良に救われたことを話した。

「そうでしたか…このお方には感謝せねばなりませんね…浪人の件は明日町方に届け出ましょう。」

「そうですな。ただの夜盗とも思えませんでしたし。」

そういうと勇志郎は行灯の灯りを見つめた。

暫くせつは湯で明良の体を拭いていたが、

「そう言えばこのおなご、肩の傷もそうですが、なんと傷の多いことか。どうしたらこんなに傷ができるのでしょうか。」

と訝しんだそのとき、

「母上！兄上！お待たせしました。」

弟の孝之助が、医者の順庵を連れて戻ってきた。

「このような夜分に申し訳ありませぬ。」

せつと勇志郎は頭を垂れた。

「いやなんの、患者を診るのが医者の務めだからの。どれ、」

順庵は夜具に横たわる明良に近寄ると、言った。

「この患者はちと訳ありのようだの。」

勇志郎は慌てて、

「申し訳ござらぬ。順庵先生。この方は私の恩人なのです。だから…」

順庵はそれを手で制した。

「患者の秘密を守るのも医者の務め。心配無用だ。」

「かたじけない。」

改めて、勇志郎は順庵に頭を下げた。

「これはひどい。何針か縫うことになりそうじゃ。」

そういうと順庵は薬箱から針と糸を取り出した。

順庵が肩の傷の縫合をしているのを三人は黙って見つめていた。

時折、明良がくぐもった声を漏らしたが、まだ暫く目を覚ましそうにはなかった。

（今日は長い1日になりそうだ。）

勇志郎は心の中でそう思った。

――――――――――――――――

周りには、誰もいなかった。いや、動いている人間は。

辺りには、つい先ほどまで一緒に戦って来た戦友達の屍が転がっていた。

チームで生きているのはもはや明良だけだった。無線が死んだため、ほかのチームの人間は生きているのかも分らない。そして、明良のちいさな体は、埃と誰の物かも判らない血にまみれて、ぼろぼろだった。

背後から銃声が聞こえた。とっさに身を屈め、辺りの死体の山に紛れ込んだ。

（私達は利用されただけだったんだ！偽の任務を与え、情報を予め流し、本隊が動きやすいようにする。私達は囮に使われたんだ！）

無人兵器の格納庫など最初から存在しなかった。

（…絶対生きて帰ってやる！雪人が待ってるんだ！）

明良の目は生きることを諦めていなかった。自分の帰りを待つ幼い弟に会うために、

仲間たちの血を吸った大地を、仲間たちの屍の山を、弾幕を掻い潜

りながら這って行く。

そのとき、明良はまだ１１歳だった。

――――――――――――――――

「う……」

明良が身じろいだ。

「うーむ。やはりこの鉄兜は脱がせたほうがよいな。その方が息もし易かろう。」

肩の傷を縫合し終えた順庵がヘルメットに手をかけようとした時、

ガッ！！！！！

「うわっ！」

順庵の腕を明良の左手が掴んでいた。そしてそのまま自分のほうへ引き寄せ、
自らの腕を順庵の首に巻きつけ、凄まじい力で締め上げた。

「順庵殿！！！！黒崎殿、何をなさる！正気か！」

だが、何度呼びかけても反応は無かった。いまだ明良の意識は戻っていなかったのだ。
積み重ねられた訓練と経験は、意識が無かろうと本能的に明良の体を動かした。

勇志郎が慌てて引き剥がそうと引っ張るが、

「ぐ、ぐぐぐ…離れん…」

力いっぱい引っ張っているのに、離れる気配が無い。逆に段々締める力が強くなってくるように感じた。

「うぐぐぐ…は、早く離してくれ！」

どんどん順庵の顔色が悪くなってくる。

「兄上！」

「勇志郎！」

せつと孝之助が悲鳴を上げた。

必死の勇志郎は、一向に離す気配の無い明良に向かい、

「黒崎殿！離しなされ！…我等はそなたの敵ではない！そなたを助けたいのだ！」

その瞬間、フッ、と明良の腕が緩んだ。

反動で転がり出た順庵が傍で盛大に咽ていた。

「げほっげほっ、何という馬鹿力じゃ。死ぬかと思うたわ！こいつめ！どんな面をしてるのみてやろうぞ！」

「いえ、順庵殿。私が外しましょう。下がっていてくだされ。」

勇志郎は順庵を下がらせ、少し迷った後明良に近寄った。

ヘルメットの金具に少し戸惑ったが、何とか外せた。

強化ケブラーのヘルメットとマスクの下から、端正な白い顔が現れた。

その顔を見た瞬間、勇志郎はふと、既視感を覚えた。

（この顔、どこかで……）

初めて会ったはずなのに、どこか懐かしい。だが、いくら思い出そうとしても霞がかったようにそれだけが思い出せない。

苦しげに歪む明良の顔を見ると、ちくりと胸が痛んだ。

嵐の夜の後

（眩しい・・・）

明良は柔らかな陽の光で目が覚めた。

（ああ、あの時倒れて……で、どうなったんだ私は。）

昨夜の森の中での出来事を思い出しつつ、体を起こした。

（着替えているということは、誰かがやってくれたのか。…それにしても、古風な家だな…こんな家今だにあるのか？）

いつもの野戦服ではなく、入院着のような服に着替えさせられていた。着物のようだ。

布団も掛けられている。

（布団に寝るのなんか何ヶ月ぶりかな。）

そんなことを思いながら、注意深く周囲の確認をする。

プロテクタは外された状態で、布団の脇に置いてあったが、近接戦闘用に腰の後ろに装着していたカーボンナイフはそのままになっていた。だが、バックパックとライフルは見当たらない。どこかに片付けられたのか。

肩の傷の確認をした。

（傷も縫合されている…）

丁寧に治療されていた。

あの時、倒れてからの記憶は全く無い。

誰が運んでくれたのだろうか。

（そういえば、外はどうなってるんだ？安藤とか言う男が言うことには、ここは江戸だとか変な事言ってたな…まあ、東京の外れか埼玉辺りだろ。早く通信手段を確保して、皆の安否を確かめないと…）

明良は立ち上がり、目の前の障子を勢い良く開けた。
途端、驚いたような声が上がった。
「「うわ！」」
水差しと手ぬぐいを持って勇志郎が目の前で固まっていた。
「し、失礼いたした。気が付かれたようですな。傷の具合はどうでござるか？」
「あんた、あの時の…ええと、安藤さんだっけ？」
昨夜は暗くて顔がよく見えなかったのもあり、あまりぴんと来なかった。
明るいところでよく見ると、なかなかに端正な顔ではあるが、優しげな眼と柔和な顔立ちがいかにも
「いい人」そうな雰囲気を醸し出している。無論荒事は苦手そうに見えた。
「そうです。覚えておられましたか。いきなり倒れたので驚きました。」
「ああ、今度はこっちが助けられたよ。感謝する。」

明良は頭を無造作に掻きながら、照れくさそうに言った。

「いえ！私も黒崎殿に救われ申した。命の恩人を見捨てることなどできません。」

そういった勇志郎の顔は、心なしか赤いように見えた。

そして、ゴホンと咳払いをすると、

「あ、いや、……そのままでは傷に障ります。はやく横になられたほうがいいでしょう。」

わざとらしく話を逸らし、水差しと手ぬぐいを乗せた盆を布団の脇に置いた。

「気持ちは嬉しいんだけどさ…安藤さん達にこれ以上迷惑はかけられないよ。もう傷の痛みも引いてきたし、もう動ける。とりあえず近くにある町の場所を教えてくれ。」

「教えたら、黒崎殿はすぐにでも発ってしまうでしょう？駄目です！傷がちゃんと癒えるまでは此処で養生していてください。それにね、誰も迷惑なんて思っておりません。私も、家の者も。だから、暫くゆっくりしていって下さい。黒崎殿。」

明良は暫し困ったように勇志郎の顔をを見たあと、天井を見上げ、息をついた。

「わかったよ…暫くの間世話になる。迷惑だと思ったらすぐに叩き出して構わないからな。」

素直じゃないその言葉に勇志郎は苦笑しながら、頷いた。

居候

「マジかよ！！！私、寝てるときにそんな事してたのか！！！」

清清しい朝の雰囲気に、およそ似つかわしくない叫び声が安藤勇志郎の屋敷内に響いた。

勇志郎は明良が意識を失っていたときのことを簡単に説明していた。もちろん掻い摘んでだが。もちろん先ほどの叫び声は、順庵に掴み掛かった時の件を聞いたときのものだ。

明良は左手で顔を覆い、深い深い溜息を吐いた。

「ドクターには悪い事しちまったなぁ。後で謝りに行かなきゃな。」

「どくたー？？？」

「医者って意味だよ。英語はわかんないか。」

「黒崎殿は異国の者には見えないが、異国の生まれなのですか？」

「まぁ、ね。同じようなもんだ。気にすんな。」

「はぁ。」

良く分からない答えに勇志郎は首を傾げた。

「入りますよ。勇志郎。」

するすると障子戸を開け、勇志郎の母せつが入ってきた。

「母上、黒崎殿が…」

「分かっておりますよ。気が付かれましたか。顔色もだいぶようなりましたな。」

口調は穏やかだが、表情は少し硬かった。昨夜の事件で警戒しているようだ。

明良は敏感にそれを感じた。

「安藤さんのご家族の方ですね。私は黒崎明良と申します。昨日は助けられたにも拘らず、大変な御迷惑をかけてしまったようで、本当に申し訳ありませんでした。本日中には出て行きますので、安心してください。治療費の方は後日必ずお支払いします。」

勇志郎が驚いたように明良を見た。

明良はじっとせつの目を見据えていた。

「黒崎殿…」

せつは静かに言い放った。

「左様にございます。安藤せつと申します。……こちらこそ、息子の命を救っていただき、まことにありがとうございました。昨夜の出来事は多少驚きましたが、今の言葉を聞いてあなた様は悪いお人ではないとわたくしは信じます…どうぞ傷が癒えるまでこちらで静養なさいませ。と言っても、この通り手狭な我が家では満足なもてなしはできないかもしれませんが。」

「ですが…」

何か言おうとした明良をせつがぴしゃりと遮った。

「このまま息子の命の恩人を放り出すような真似をすれば、安藤家の名がすたりまする。」

「黒崎殿、こうなったら母上には何を言っても無駄です。おとなしゅう聞いておくのがよいでしょう。」

「……すいません、せつさん。暫くお世話になります。」

明良の完敗だった。

平和な空の下で

「それでは黒崎殿。朝餉の用意が出来ました故、膳をお持ちしましょう。」

そう言うと、せつは何事も無かったかのように部屋から出て行った。

暫くせつが出て行った後を見つめながら、勇志郎に聞こえないように呟いた。

「あまり怒らせない方が利口だな。士官学校（アカデミー）の教官よりおっかなそうだ。」

「・・・・どうされました？」

「いや、なんでもない。それより、外を見ても良いかな。」

「外ですか？構いませんが…。」

勇志郎が障子戸を開けた途端、部屋の中に明るい日差しが差し込んだ。

明良は目を細め、障子戸の向こう側の景色を見た。

澄み渡った青空が見える。

庭の片隅には菜の花が咲いていた。

「……」

明良は急に立ち上がり、ふらふらと縁側に出た。

「明良殿、あまり動くと傷に障りますぞ。」

勇志郎の声が聞こえていないのか、明良は子供の様に空を見上げている。

そして、ぽつりと呟いた。

「きれいだ。本当に。」

「今日は、よう晴れましたからな。暖かくなりそうです。」
ははは…と能天気に勇志郎が言った。

『…そうか。やはりこれは…』

――――――現実なのか。――――――

上空からは、戦闘機やヘリの爆音も聞こえては来なかった。
銃声も、ウラジーミルの凶暴なエンジン音も聞こえない。
戦場の気配など、微塵も感じられなかった。
聞こえてくるのは鳥の声と木の葉を揺らす音だけだった。

「空は、こんなに美しかったんだな。」

隣では、勇志郎が不思議そうな顔をしている。
明良は、苦笑しながら「何でもないさ」とはぐらかした。

空は、何処までも青く澄んでいた。

挿話

「美味そうだ…。すげー美味そうだ。」

明良は心の底から呟く。戦場では、携帯糧食(レーション)しか食べる物がなく、戦況が悪化してからは、ほぼ何も食してなかった。こんなに人間らしい食事など数ヶ月ぶりだ。

朝餉の膳には、粥と菜の花の和え物、大根の漬物が添えられていた。

「大した物では御座いませんが…」

「いただきます！」

せつが言い終らないうちに、明良はものすごい勢いで食べ始めた。

二人は呆気に取られたように見つめている。

「いやはや、いい食いっぷりですな…母上。」

「全く、女子であると言う自覚はあるのでしょうかね、この方は。」

呆れた様にせつが言った。

悲しい笑み

朝餉を終えて、一段落した後、明良のいる居間に安藤家の者が全員集まった。

せつの傍に座っている孝之助に明良は不思議そうな目を向けた。

「ああ、私の弟の孝之助です。孝之助、ご挨拶を。」

勇志郎に促され、孝之助は遠慮がちに進み出て、

「安藤孝之助に御座います。」

ちょこんと小さな頭を下げた。

その可愛らしい仕草に、自然に顔が緩む。

「道理でな。お兄さんに顔が似てるよ。孝之助君はいくつなんだい？」

「今年で十三になりまする。」

一般的な十三歳にしては少し体が小さいように感じたが、はきはきと受け答えをする姿は、同世代の子供より大人びている。

「そうか…しっかりしてるな。」

明良はふと笑みを浮かべた。孝之助の姿を誰かと重ねるように、いとおしげに目を細めた。

勇志郎の目には、その笑みが何故か悲しそうに映った。

孝之助を紹介した後、今後のことを話し合った。せつに何処から来たのか問われたが、明良は記憶を失い、帰る所も思い出せない。と嘘をついた。心苦しかったが、本当のことを言っても混乱させるだけだと思ったからだ。

だが2人は明良のその態度から、あまり触れられたくない事なのだと思い、その話題にはもう触れなかった。

「とりあえず、記憶が戻るまで当家に逗留されては如何か？」

勇志郎のその一言で、話は纏まった。

そうして、明良の安藤家での生活が始まった。

――――――――――――――――

「では母上、私は町方と組頭に昨日の件の届けを出してきますので。」

勇志郎と、剣術の稽古があった孝之助が出掛けて行き、家にはせつと明良の二人になった。

「黒崎殿、何か御用はありますか？」

そう言われ、明良は、手始めに最初から疑問に思っていたことを口にした。

「これは、どうやって着るんですか？」

着替えの浴衣を両手で広げてせつに聞いてみた。

「着物の着方も忘れてしまったのですか！？」

「・・・ハイ。（元から分からないけど。）」

「先が思いやられますな…」

「ほんとスイマセン…」

前途多難だった。

生存者

明良が安藤家に居候を始めてから４日が経った。

順庵が驚くほどの驚異的な回復力を見せ、肩の傷は動かすには支障がないほどにまで回復した。

いい加減寝ているだけの病人生活に飽き飽きしていた明良は、ついにせつと勇志郎に切り出した。

「私が最初に倒れていた場所に行きたいんです。何か手がかりがあるかもしれない。お願いします。」

と言ったのは、本心ではあったが、もう半分は仲間の安否を一刻も早く確かめたかったのだ。

本当は怪我を押してでも行きたかったのだが、勇志郎に止められたことと、明良にとってここは未知の場所であり、万が一敵地となれば、負傷した身にはリスクが高すぎると判断したからだ。

せつは渋った。その理由は、外へ出れば、良くも悪くも明良の外見がかなり目立つからである。

短く切られたショートヘアと、１７０ｃｍの身長は、この時代の人間からするとかなり奇異である。

それが女性ならなおさらだった。

そして整った顔と、日本人にしては彫りの深い顔立ちは、老若男女問わずかなりの目を引くだろう。

せつがそれを理由に断ると、すかさず、勇志郎が助け舟を出した。

「それでは、男の格好をすればよいのではないですか？背丈も私とあまり変わりませんし、私の着物をとりあえず着ればよいのでは。」

「なんと！？黒崎殿に失礼ではありませんか！」

とせつが異を唱えたが、、

「いい案だと思います。男装すれば、周りからも目立なくなるでしょうし、私もその方が楽です。お願いします。」

明良は勇志郎に賛同した。

せつは暫く逡巡していたが、勇志郎が一緒に行くことを条件に、外出するのを承諾した。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「黒崎殿は上背がありますゆえ、ちょうどいい具合にございますね。」

明良は奥の間でせつが用意した着物に着替えていた。着るのには無論せつに手伝ってもらっている。

乱れ箱には、うす鼠色の着流しに苔色の袴、黒足袋が用意されていた。

ちなみに胸はさらしで目立たぬように巻き、明良の希望でその上にモスグリーンのタンクトップを着ていた。

「そ、そうですか？ありがとうございます。」

笑う明良の後ろに回り、帯を直すとせつは明良の背を軽くたたいた。

「はい。出来ましたよ。今回はわたくしがすべてやらせていただきましたが、次からは自分で着られるようになりませぬとこれから大変ですよ。」

せつの一言に明良は反論の余地は無かった。

「うぐっ、はい。仰るとおりです。頑張ります。」

せつは明良の前に回り全身を眺めるとうっとりと溜息をついた。

中性的で彫りの深い顔立ちに、高身長も相まって、この時代の男性には無い独特の魅力を醸し出していた。背筋は軍人らしく常にピンとしているので、あまり女々しい感じはしない。

「……髪が少し気になりますが、これはなかなかの男前になりましたな。」

「それって、褒めてんですか。」

明良はげんなりと呟いた。

居間で待っていた勇志郎に見せに行くと、目を見開いて固まった。そして暫くしてから感想を言った。

「黒崎殿、すごく似合っていますよ！私よりも男前だ…いいなあ…」

いい加減その一言にカチンと来た明良が怒鳴った。

「おい、それ微妙にけなしてんだろ表出ろテメー！」

「な！何故ですか！？褒めているんですよ！……な！ちょ！やめてください！」

にわかに騒がしくなった居間に向かい、堪忍袋の緒が切れたせつの雷が落ちたのは言うまでもない。

同時刻、某藩江戸藩邸下屋敷にて。

「まだ見つからぬか。」

「はっ。この４日間江戸中を隈なく探索したのですが、未だそれらしき者は…」

「よいか、必ず探し出せ。あの浪人と、あの三人を殺した者をな。我が藩の存亡に関わる事じゃ。人手が必要なら幾等でも連れて行くがよい。次は、良き報告を聞かせてくれ。」

「はっ。」

「もうよい。往け。」

平伏していた男は音も無く退出した。

報告を聞いていた人間は、そんなことを気にも留めず、煙管をひとふかしすると、

「……これは、一体何じゃ。」

手に持っていた、先の潰れたライフルの弾を食い入るように見つめて、言った。

「黒崎殿、遅いな。」

2人は、あの夜の山に来ていた。明良は、「少し周辺を見てくる。」と言ったきり勇志郎を残してふらりと消えた。

それからずっと明良に出会った河原の岩場に腰掛けて時間をつぶしている。

最初は河原の石を投げてみたり、ボーっと雲を見ていたりしたが、いい加減それも限界だった。

「もう小半時は経っているんじゃないのか…？全く。怪我もまだ完治していないのに。」

勇志郎がぶちぶちと文句を垂れている頃、明良は目的の場所を見つけていた。

夜の森と昼の森とは雰囲気が違い、少し探すのに手間取った。

「見つけた。ここか…」

ざっと見回しただけでは何の異常も無い様に見えた。踵を返そうとしたとき、視界の端に何かを捕らえた。

「…？」

十数m先の茂みに何かが見えた。何かが鈍く反射している。1つではない。無数にある。

「なんだ？」

十分用心しながら近づいてみると、見覚えのある物が見えた。

「ドッグタグ（認識票）？…」

光っていたのはドックタグだった。それには兵士達の所属部隊とＩＤが刻印されており、それを見れば一目で身元が分かるようになっていた。だが、ナノマシン注入によるＩＤ登録や身体能力の強化が一般的になり、ドックタグをつける必要性は無くなり、つけている兵士はごく一部となっていた。

もちろん米軍の兵士になっている以上はナノマシンの注射は受けている。受けていない兵士などいなかった。ナノマシンによって身体能力は強化されるが、すべてが管理されていた。まるで、軍用犬の様に。

明良たちの小隊はそれを皮肉ってドックタグを首に提げていた。

「これは犬の首輪さ。」

そういって笑いあったのがつい最近に感じる。

ドッグタグは殆どが熱で融け、焼け焦げていた。其処には見慣れた名前が刻印してあった。

明良はすべてを悟った。もはや【生存者】は自分一人きりなのだと。

「皆…其処にいたのか。」

明良は無数のドッグタグを拾うと、いとおしげに撫でた。

その目からは涙が留まることなく流れていた。

午後のひと時

川辺には、西日が差しかかっていた。風も冷たくなってきている。

「遅すぎる…何かあったのだろうか。」

いくら待っても戻ってこないので、捜しに行こうと腰を上げた。

「おーい。待たせたな。」

ちょうど、山の中から明良が出てきた。

「　！　黒崎殿！丁度探しに行くところで御座いましたぞ！」

あまりに遅いので、心配していました。と言う勇志郎の言葉に、

「悪い悪い、ちょっと迷ってしまってね。なかなかたどり着けなかった。」

明良は悪びれることなくいつものようにへらへらと返した。

だが、勇志郎には明良が無理に明るく振舞っているような感じがした。

「…なにかあったので御座るか？」

「…いいや、何も無かったよ。何も。」

勇志郎は、それ以上問い詰めることはしなかった。

一瞬の沈黙の後、明良はくるりと背を向け、

「さあて！早く帰んないとせつ殿に怒られちまうぜ！」

いきなり、家までダッシュだ！と叫びながら、明良は走り出していた。

「あ！黒崎殿！」

勇志郎も、慌てて明良の後を追った。

――――――――――――

前を走っていた明良が、ちらと振り返った。

「なんだよ、だらしないな。もうバテたのか？」

20分ほど全力疾走して、ヒーヒー言いはじめた勇志郎を振り返り明良は呆れたように声を掛ける。不思議なことに呼吸一つ乱れていない。

「あっ、あんなに走り続けていたのに、なぜ汗もかいていないんですか？！」

息も切れ切れな勇志郎が抗議した。

「慣れてるからな！」

「それは理由にはなりません！」

不毛な問答を繰り広げていた矢先、戸惑うような声が聞こえた。

「…兄上？今お帰りですか？」

勇志郎の弟の孝之助だった。道の反対側から息も絶え絶えな兄の姿を不思議そうに見つめていた。

「孝之助！？お前、稽古は終わったのか？」

孝之助の顔色が少し変わった。

「…はい。今日は少し体調が優れないので、早めに上がらせていただきました。」

「そうか…大事にいたせよ。母上が心配するからな。」

「はい質問。孝之助君は、何の稽古をしてるの？」

その会話を聞いていた明良が口を挟んだ。

「え？あ、剣術の稽古ですが…」

孝之助が戸惑いながら答えた。

その言葉を聴いた途端、明良の目が輝いた。

「今度私も行ってみても良いかな？一度で良いから見てみたかったんだよなぁ！」

「え！？でも…ただの町道場ですよ。」

「良いんだよそんなことは！頼むよ！見学するだけだし。ね？」

思っても見ない展開に、孝之助は兄の顔をうかがった。

勇志郎は、諦めろ。と言うように首を振った。

「分かりました。明日師範代に聞いてみます。」

「サンキュ！ありがと！」

明良は、鼻歌を歌いながら、さっさと歩き出していた。

嵐の去った後の様に、兄弟はその後姿を見つめていた。

「……面白い方ですね…黒崎殿は。」

「ああ。時々ついていけなくなるがな。」

「ところで兄上。」

「なんだ？」

「お二人は、なぜあんなに走っておられたのですか？」

「な！見ておったのか！？」

「ええ。山から出てきたところからずっと。」

[...]

孝之助の憂鬱

春の昼下がり。通りに咲いていた桜の花も散り、葉桜となった木々が所々見受けられた。

それも風流だと、粋な江戸者は思うだろうが、悩める少年には今そのようなことを考えている余裕は無い。

3日に一度の剣術の稽古へ向かう安藤孝之助の足取りは重かった。

「…どうしよう。」

孝之助は憂鬱だった。

その憂鬱の原因の1つは、最近転がり込んできた、奇妙な居候、黒崎明良の存在だった。

孝之助は、正直なところ明良の事をあまり好きになれないでいた。初めて兄に連れられて（正確には担がれて）きたとき、本当に鬼か物の怪かと思っていた。

野戦服とプロテクタ、マスクとゴーグルなどまだこの時代には存在しない。当然と言えば当然の反応だ。

そして、その鬼から、女の体が出てきたのにも驚いた。

だが明良は、女子にもかかわらず、しとやかと言う言葉も無縁で、男の様に話し、飯を食い、髪も結わず、男並みに背が高かった。

最初は着物の着付けすら分からず、母がどうしたものかと溜息をついていたのを覚えている。

しかし、時が経つにつれ、母や兄はあの奇妙な居候にも慣れてきたのが分かる。だが、自分は何時まで経っても慣れなかった。

明良はそんなことを気にも留めていないように、母や兄と同じように自分にも接している。よく言えば陽気な性格だが、孝之助には無神経で図々しい所が嫌いだった。

家の中で顔を合わせるのにも戸惑うと言うのに、今回の件でいっそう憂鬱になった。

「やっぱり断ろうかな・・・」

そんなことを思いつつ、歩いていたら、いつの間にか道場に着いていた。

直心陰流の道場、奥村道場は昌平橋を渡ってすぐにある。

既に中からは竹刀で打ち合う音と、威勢のいい掛け声が響いていた。

急いで中へ入ると、門弟たちの稽古を見ていた師範代の奥村籐兵衛に声を掛けられた。

「おお来たか。珍しいな、お主が遅れるとは。」

奥村道場の師範代、奥村籐兵衛は道場主で師範である奥村十衛門の息子である。

先年から、腰を悪くした十衛門に代わり、道場を取り仕切っていた。

人柄は温厚で、上士の子も下士の子も分け隔てなく教え、門弟達からも慕われていた。

「申し訳ありません。師範代。」

孝之助は手早く防具を身につけ、空いているところで素振りを始めた。

黙々と竹刀を振るっていると、周りが少し騒がしい。皆、道場の入り口付近をしきりに気にしている。

なんだろうと、皆が見ている方へ目をやると、入り口に憂鬱の原因である人物が、居た。

孝之助は驚きで、竹刀を振り上げたまま固まっていた。

（何故此処に居るんだ！？）

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

４０分前。安藤邸にて。

「孝之助ときたら、また忘れたのですね！」

安藤せつのあきれたような叫びが屋敷中に響き渡った。

その声に居候の黒崎明良はビクッと肩を震わせた。

どうも、自分が怒られているような気がして落ち着かないのだ。
ただ飯ぐらいでしかもどこから来たのかわからない（未来から来たということは伏せている）という自分でも笑ってしまうほどの不審人物なのだから。

「ど、どうかしたんですか？」

「あ！黒崎殿！いえ、孝之助に使いを頼もうと思って、財布を渡したのですが、あの子ったら、剣術の稽古の用意は持っていったのに、財布をこちらに忘れていってしまったのでございます。」

恐る恐る明良が声をかけると、せつははっと声を荒げた自分を恥じるように、取り繕った。

「なんだ、じゃあ私が行ってきますよ。」

「黒崎殿がですか？」

「ええ。何にもしないでいるのも申し訳ないし。その後孝之助君と一緒にお使いも行ってきますんで。」

「ですが、」

「道場の場所も分かりますし、近いですから。それに勇志郎さんにいつまでも付いてきてもらうのも悪いんで、この辺の地理も覚えるためにもちょっと行ってきますよ。」

「そうですか。ではお言葉に甘えさせて頂きます。ただし、あまり

目立つようなことはなさらぬように。」

明良は予想通りの言葉に苦笑しながら、財布を受け取った。

「了解。いってきます。」

意気揚々と屋敷を出た。

大通りに出ると、商店が立ち並び人通りも多くなってきた。

（これが江戸…東京のはるか昔の姿か…すごい活気だな。）

周りのものすべてが新鮮だった。長い棒の両端に桶をくくりつけ魚を売っている人、鮮やかな着物に身を包み、楚々と歩いている少女たち。勇志郎のように刀を帯びて歩く武士たち。

はじめて見る物ばかりなのに、どこか懐かしい感じがした。

途中、物珍しさに３０分ほど寄り道をしたのは言うまでもない。

甘酒売りの声に後ろ髪を引かれつつも昌平橋を渡り、孝之助の居る道場に着いた。

（おー賑やかだねぇー。）

竹刀で打ち合う音や掛け声が外まで響いている。

「すいませーん。」

とりあえず声を掛けた。

すると玄関近くに居た若い門弟が明良に気づいた。

「当道場に何か御用か？」

「あ、すいません。安藤孝之助さんの家に世話になっている黒崎と申します。孝之助さんの忘れ物を届けにきたのですが、稽古が終わるまで、ここで見学させてもらってもいいですかね？」

「暫し待たれよ。」

若い門弟が師範代の奥村籐兵衛にその事を尋ねると、籐兵衛は快く承諾した。

「ご覧の通り、狭苦しいところですが、ゆっくりと見物してくだされ。」

と、自ら道場の上座に座布団を用意し、明良に勧めた。

「お忙しいところ急なお願いをして申し訳ありません。」

「何の何の。某も偶には他流派の方と話をしたいと思うておったところです。ちなみに、流派はどちらですかな。」

籐兵衛は明良の事を剣客だと思い込んでいるようだった。

「あ、お恥ずかしいんですが、剣はまるっきり使えないんです。竹刀を握った事もなくて。」

その答えに籐兵衛は驚いた。

「何と。左様でござるか。某はかなりの遣い手と見たのですが…」

「あはは。格闘技が少し出来るくらいなんで、全くたいした事ないですよ。」

そういって、門弟達の打ち込み稽古を眺めながら明良は目の前のお茶を啜った。

孝之助の憂鬱２

孝之助は苛々した気分を断ち切るように竹刀を振り下ろしていた。

師範代に聞いてみるといったのに、平然と押しかけて、茶を飲みながら（しかも上座で！）のほほんとしている明良がまったく気に入らない。

気持ちの乱れが太刀筋にも伝わったのか、兄弟子の徳永助次郎に今日は剣が荒れておるぞ。と注意された。

溜息をついて、竹刀を構えなおしたその時、

「だから、師範を出せといっておろうが！」

道場の玄関先から胴間声が響いてきた。

先ほど明良に応対した若い門弟と、派手な着物で着飾った十七から十八くらいの侍と思しき若者四人が口論をしている。皆刀の柄に黒い布を巻いていた。

「当道場は他流試合は禁じるとの決まりなのです。どうかお帰りください。」

「では、稽古ならよいであろう。」

「しかし、」

「ええい！貴様では話にならんわ！どけい！」

「うわっ！」

派手な着物の若侍に強く押された門弟は尻餅をついた。

若侍の集団はズカズカと道場内に上がりこみ、何を勘違いしたのか、真正面で茶を飲んでいた明良に目をつけた。

「貴様がここの師範か。」

「は？」

目を白黒させながら返事をしようとしたら、脇から籐兵衛が冷静に答えた。

「そちらの方は見学に来られた方だ。私が師範代の奥村籐兵衛だ。」

「師範はどうした。」

「師範は病で現在療養しておる。貴殿も名乗られたらいかがか。」

「俺は有馬雄之進。黒柄党の頭領だ。」

雄之進は胸を張り、誇るように言った。

黒柄党は旗本の上士の次男や三男が集まり、徒党を組んで狼藉を働いている無頼の集団だった。柄に巻いている黒い布は彼らのチームカラーであり、現代風に言えばカラーギャングといったところか。

「黒柄党…最近町道場を荒らしまわっているのはおぬし等だな。」

「荒らす？人聞きの悪い。稽古を頼んだのだ。丁重にな。」

雄之進は見下すように籐兵衛に言った。

「今日は年少の者が多いゆえ、お引取りいただきたい。」

その言葉を聴くと、雄之進は小ばかにしたようにあたりをぐるりと見回して、笑った。

「此処は臆病風に吹かれておるぞ。皆立ち会おうともせぬ。のうお前ら。」

追従するように雄之進の取り巻きたちが嘲笑った。

脇に居る門弟達は悔しそうにこぶしを握り下を向いている。だが、誰一人として刃向かおうとはしなかった。

彼らの身なりからして、どう見ても大身の旗本の子息だと思ったからだ。ここで揉め事を起こせば、家の者にまで累が及ぶ。だから何もいえなかった。

思わぬ展開に明良は見物を決め込んでいたが、見ているうちにだんだん腹が立ってきた。

（どう見てもいいところのお坊ちゃんだろうが、この人を見下した態度がいちいち癇に障る…）

明良達は少年兵上がりの傭兵部隊であったため、小さい頃から貧しさから犯罪に手を染めていた者も居た。その為、正規の兵達から高圧的な態度をとられたり、馬鹿にされ、わざと危険な役割を振られたりもした。だが、そんな彼らだからこそ誰よりも仲間を大事にし、

結束も固い。明良も、自分自身が馬鹿にされることには何一つ動じなかったが、仲間をひどく侮辱された時は烈火の如く怒り、まわりが総動員で止めなくてはならない事態にまで発展してしまうときも多々あった。

（気に食わねぇ…）

苛々しながら、事の成り行きを見守っていると、一番端に座していた孝之助が目に留まったのか、雄之進の取り巻きの一人が木刀で孝之助のほうを指した。

「随分と可愛らしい剣士もいたものだな、そのような細っこい腕では、竹刀を振り回すよりも着飾って、芳町を歩いておるほうが似合うのではないかな？」

ドッと若侍たちが声を上げた。おかしくてたまらないらしい。

孝之助の顔色がサッと赤くなった。屈辱で体が震えていた。

言葉の意味は分からなかったが、明らかに侮蔑の意味がこめられているのは、孝之助の反応で理解できた。

明良の目つきが変わった。

―――――――――――――――――――――――――――

「竹刀を持つより、着飾って芳町で歩いていた方がお似合いだな。」

その言葉は何よりも孝之助にとって屈辱だった。

確かに自分は同年代の子供より背も小さいし、顔は母譲りで色白の女顔だった。今までそれをからかわれた事は無かったが、成長するにつれ、同い年の道場仲間がだんだんとがっしりと逞しくなっていくのに対し、自分は日にも焼けず、ひょろひょろのままだった。自分だけが周りから取り残されていくような感じがしていた。自分のコンプレックスを大勢の前で侮辱された孝之助は怒りに身を震わせた。

（許さぬ！！！）

立ち上がろうとしたが、足が動かない。ひざに置いたこぶしが震える。

———怖い

目の前にいる４人は無頼者だが、到底敵う相手ではない。体格も膂力も違いすぎる。

自分が歯向かった所で、兄や母にも累が及んだらと考えて、恐怖を感じた。

（私は、言い返すことも出来ないのか）

情けなくて視界が滲む。

道場には下卑た笑いが響き渡っている。

だが、それよりも信じられないくらい下品な言葉が、道場に響いた。

「おいそこの糞ブタ野郎。」

その声はいまだに　馬鹿笑いを響かせている若侍の耳に届いた。

笑い声がやむ。

「誰だ！？今言った奴は！！」

先ほど孝之助に侮蔑の言葉を投げつけた若者が叫んだ。静まり返っていた道場がざわめいた。

「うるせぇなあ。デカイ声出さなくても聞こえんだよ。弱いもの苛めしか能が無いニート野郎共。」

周囲が一斉に明良に注目した。

「何だと！！！」

若侍が、やっと明良のほうを向く。

「ピーピーうるせぇ。このクソ餓鬼共が。っつったんだよ。その雲よりも軽そうな頭に鉛ぶち込んで重たくしてやろうか？少しはお利口さんになるかもな。」

「何を！」

その言葉を聞いた若侍達は色めき立つ。

ゆっくりとその場で立ち上がる。脳裏では出かける前にせつに言われた言葉が再生される。

（目立つことはなさらぬように。）

「ごめんなさいせつさん。約束は守れそうにありませんでした。」

小さくつぶやくと、明良は射抜くような眼差しで、目の前の集団を見据えた。

「その糞ムカつく面をもっと男前に整形してやるっつってんだよ。来いよ。まとめてな。」

「く、黒崎殿?！」

思わぬ展開に籐兵衛は戸惑う。

「すいません奥村さん。ご迷惑かけて。すぐ終わりますから。」

素晴らしくさわやかな笑顔を籐兵衛に向けると、道場の真ん中へ向かった。

明良に散々なじられた４人はすっかり頭に血が上っているようだった。

明良を中心にして囲み、手には木刀を持っている。当たり所が悪ければ死ぬだろう。それでも余裕の笑みを浮かべながら、明良は飄然と佇んでいる。

竹刀すら持たない明良に、周りの門下生は不安そうに見守っている。

「得物をとれい！」

丸腰のままで居る明良に業を煮やした雄之進の声が飛んだ。

その言葉に挑発的に明良が答えた。

「テメェらなんざ素手で十分だ。３０秒で沈めてやるよ。」

そんな明良の言葉に、完全にぶち切れたのか、１人が仕掛ける。

「ええええい！」

右後方から頭部を狙ってきた。懐に入るようにかわし、左脇に木刀をつかんでいる腕ごと巻き込むと、そのまま右手で掌低を鼻に食らわせた。拳だと痛めることがあるからだ。拳より威力が低いとはいえ、ＣＱＢ（近接戦闘）の訓練成績は常にトップクラスだった明良の一撃をまともに食らい、哀れな若侍は鼻血を派手に噴出しぶっ倒れた。

「次。」

薄笑いを浮かべ、挑発する姿に、仲間を倒された若者達は激昂した。

（実戦では武器がなくても敵は待ってくれない。自分の肉体、その辺に落ちているものすべてを武器にしろ。）

過去に教官に言われた台詞が頭をよぎる。

「貴様！」

左前方から明良の胸を貫くように突いてきた。かわした瞬間に柄と胸倉をつかみ、強烈なヘッドバットを喰らわせた。

「ぐはっ！」

「いって！石頭だなこいつ！…次は？」

少しくらくらしたが、すぐ残りの2人に向き直る。

「どうする？もうやめとくか？」

「ここまでコケにされて黙ってられるか！」

興奮で顔を赤くした雄之進が打ちかかってきた。振り上げた瞬間、横に回り、ひざを狙いけりを叩き込み、体勢を崩すと同時に胸倉をつかみ、後頭部に肘鉄を決めた。こちらも手加減をしたので死ぬことはたぶんないと思うが。

3人の仲間がものの数十秒で倒され、残りの1人は青ざめて震えていた。戦意喪失、白旗状態だ。

「おにいちゃんよ。もうやめとけよ。な？怪我してもつまんねぇだろ？このまま本気出したら、怪我じゃ済まないかも知れねぇよ？」

構えを解いて明良はやさしく諭した。だが、ぎらついた肉食獣のような眼差しは若者を恐怖に陥れるのには十分だった。

「は、はい。大変申し訳ありませんでした。」

意外にあっさりと若者は降参した。今にも土下座してあやまりそうな勢いだ。

「じゃあこいつら起きるまでちょっと待ってろよ。起きたらこいつら連れて帰ってもらうからな。それまでそこで腕立て伏せしてろよ。そっちが突っかかって負けたんだからそれでチャラにしてやるよ。」

というと若侍に、戸惑った様に「腕立て伏せとはいかなるものか？」といわれ、ため息をつくと、明良は自分で見本を見せて、やらせた。

途中から腕がプルプルしてきたようだが、もっと体下げろ！数える声が小さい！などの檄が飛んでいた。

もはや新兵と鬼教官の図だった。

周りでは門弟たちと籐兵衛が唖然とした表情でこの異常な事態を見つめていた。

孝之助の憂鬱と葱と豆腐

誰一人として目の前で起こった事が信じられなかった。

丸腰の人間が、瞬く間に木刀を持った3人の男を倒してしまったのだ。

孝之助もポカンとした顔でこの奇妙な事態を見守っていた。

静まり返った道場内で、若侍が腕立て伏せをしながら、回数を数えている。かなりシュールな画だ。

「さ、３５６…」

「浅い！追加２０回！」

「も、もう無理です…」

そんなやり取りをしていたら、倒れたままほったらかしにしておいた3人が気が付いたようだ。

「いてて…」「っ痛・・・」「うううう…」

「おう、おきたか。おい、もうやめていいぞ。」

それを聞いた途端に腕立てをしていた若侍はべしゃりとうつ伏せに崩れた。汗が全身から滴っている。

「情けねえなあ。そんなんじゃ前線に出られねぇぞ？」

呆れたように明良が声を掛けると、雄之進が睨みつけてきた。

「貴様！このような真似をしてただで済むと思うなよ！わしの父は…」

「あぁ？パパに言いつけてやる～ってか？ばっかじゃねえの？手前の喧嘩も親父に尻拭いしてもらうのか。

クソ情けねえ。反吐が出るぜ。得物使わなきゃ喧嘩もできねぇ奴ならしょうがねえか。」

雄之進の顔が見る間に赤くなり、何か言ってくるかと思いきや、そのままうつむき、先程とはうって変わって寂しそうな顔に変わった。

「貴様に、わしらの気持ちなど分かるか！父上はわしにやりたい事

をやっておれば良いと言うが、それは兄上しか見ておらぬからじゃ！小さい頃から父上はわしの事などどうでもよかったのだ！だからわしはやりたい事をやるだけよ！」

雄之進は心の奥底を吐き出すように言い放った。

この時代、武家社会では、大体が長男が家を継ぐと言うシステムだった。

女ならば早くから他家へ嫁ぐ言う事は比較的容易にできたが、次男三男などの場合は、婿養子先を探さねばならない。

そして、婿養子先が見つかるまで、彼らは冷や飯食い、部屋住みなどと呼ばれ、肩身の狭い思いを味わいながら暮らしているのだ。

「だから、同じ立場の者たちとつるんで、自分より弱い立場の人間に八つ当たりをしてたって訳か。」

静かな明良の言葉に、雄之進たちは言葉に詰まる。

「そうやって狭い世界で腐って何が楽しい？どうしても家が嫌なら出て行けばいいだろう？ガキじゃねぇんだ。てめぇの生き方くらいてめぇで決めろ。それにな、自分の人生は親や誰かのものじゃない。自分のものだ。」

「わしの人生は、わしの物・・・？」

「そうだ。お前らはまだ若いんだ。自分の可能性を自分で否定する事はないさ。さあもう帰んな。今のお前らに必要なのは休息だ。」

４人の若者は放心したようにふらふらと振り返る事も無く道場から出て行った。

沈黙が道場内を支配した。その後に、

わああ！

両脇から門弟達の賞賛の声が上がった。

「すごいすごい！先の体捌きは何処で習得したのですか？」

「私にもおしえてください！」

などの声が口々に上がる。

それをやんわりとかわしながら、籐兵衛の元へ向かう。

「お騒がせして申し訳ありませんでした。」

明良は師範の籐兵衛に頭を下げた。怒鳴られるのは覚悟していた。部外者が余計な首を突っ込んだのだ。

だが、籐兵衛の答えは意外なものだった。

「いや、素晴らしい立合いを見せていただきました。門弟達にもよい刺激になったでしょう。」

あんまり籐兵衛が褒めるので明良はどうにも照れくさかった。

「お恥ずかしい。どうも気が短いのでまだまだですよ。」

ははは…と笑っていたら、せつに頼まれた用事を唐突に思い出した。ハッとわれに返り、

「しまった！買い物頼まれてんだった！すいません！奥村さん、これで失礼します！」

「そうですか。また何時でもいらしてくだされ。歓迎いたしますぞ。」

「ありがとうございます！孝之助！」

急に呼ばれた孝之助はぎょっと明良を見た。

「葱と豆腐買いに行くぞ！私じゃ場所が分からねぇ！」

と、孝之助の手をひっぱり、嵐の様に道場を後にした。

辻斬り

夕暮れの中を、背の高い武士と、まだ元服をしていないのか、前髪を残した少年が歩いてゆく。武士は少年を気遣っているのか、少年に歩調を合わせゆっくりと歩いている。

背の高いほうは無論明良だ。腰には邪魔になるからと竹光すら差していなかった。すれ違った勤番風の侍が怪訝な顔で振り返った。

だが明良はそんな事を気にも留めず、上機嫌に口笛なぞ吹いている。明良の好きな古い映画のテーマなのだが、もちろんこの時代の人間には分からない。すれ違う人々の視線を感じるが、お構いなしに口笛はサビの部分に入ろうとしていた。

「あ、あの、黒崎殿…」

おずおずと脇を歩いていた孝之助が口を開いた。

「ん？ああごめん煩かった？」

「先刻は、ありがとうございました。」

俯いたままの頭に、何かが乗った。

「孝之助君は、偉かったな。あんな事を言われてもじっと耐えた。」

やさしい声音だった。思い出したら涙が溢れた。

「…私は、怖かったのです。あんな屈辱的なことを言われても、恐怖で体も動かなかった。情けないです。武家の子の癖に。って、わあ！」

明良の手がわしわしと孝之助の頭を掻き回した。男よりも細いが、並の女より節くれだったごつごつした手だった。

「…恐怖を感じる事は、生き残る上で大事な事だ。だがそれに飲まれてはならない。」

「え？」

「昔、言われた言葉さ。さあ、買い物に行こう。日が暮れてしまうよ。」

（元気付けてくれたのかな。）

孝之助は脇を歩く明良をまじまじと見ていた。背丈が違いすぎるので、殆ど見上げるような格好になったが。

（女人なのに、すごく口が悪くて、がさつで、）

先程の出来事で孝之助の中で明良を見る目がほんの少しだけ変わっていた。

（無茶苦茶な人だけど、嫌いじゃないかな。）

孝之助の視線に明良が気づいた。

「何だ？何か付いてるか？それとも葱臭いか？私？」

明良の手には葱が三本と豆腐用の木の桶が握られていた。

「いえ、何でもありません。黒崎殿、『一応』形だけは武士なのですから、相応の振る舞いを…」

孝之助の忠告を全く聞いていないかのように、豆腐の棒手振りを見つけて、駆け寄った。

「すいませーん！豆腐2丁ください。」

「お侍さん、いいところに来たねぇ。ちょうど閉めようと思ってたとこだ。残りの三丁全部二丁分の値でいいよ。」

棒手振りは、愛想のいい笑みを浮かべて豆腐を渡す。

「いやぁこれはどうも。有り難うございます。」

「どうせ売れ残っちまうからな。いいって事よ。それよりもお侍ぇさん、ここんところ辻斬りが出てるって話だ。帰りは用心した方が

いいですぜ。」

「辻斬り？」

「ああ、話じゃあ、お侍ぇばっかり狙うって話だ。しかも、勤番侍みてぇなかっちりした身なりの侍ぇじゃなく、御家人とか浪人みてぇな格好（なり）したお侍ぇばっかり狙うらいしんでさぁ。」

「それは怖いなぁ。ありがとう。気をつけるよ。」

支払いを済ませ、棒手振りと別れた。

「なあ。そういえば辻斬りってなに？」

唐突に明良が聞いた。

「はあ？分かってて聞いていたのではなかったのですか？」

「うん。」

孝之助ははぁーと溜息をつくと、

「辻斬りとは武士などが道行く人を刀で斬り捨てるという卑劣な悪行の事です。主に夜が多いですね。それよりも、早く帰りましょう。辻斬りにあったら元も子もありません。」

「ふーん。無差別殺人、シリアルキラーってやつか。タチ悪ぃな。」

急かす孝之助を尻目に、明良はつぶやくと、遠くを見た。夕日は既に沈み、薄闇が江戸の町に広がろうとしていた。

有馬雄之進は奥村道場を出た後、どういうわけか行きつけの店で酒を飲む気にも、馴染みの妓(おんな)にも逢う気も起きず、仲間達と別れると、痛む体を引きずり、ふらふらと家路についていた。

さっきから頭の中で、明良に言われた言葉を反芻していた。

「わしは…今まで何をしてきたんだろうか。」

溜息をつく雄之進の前方から、一人の武士が歩いてきた。もう日も暮れるころだと言うのに、編み笠を目深にかぶっていた。足裁きからしてかなりの実力者のようだ。雄之進は男に気づいたが、特に気にも留めず、すれ違おうとした時だった。

すれ違いざま、編み笠の男が刀を抜き雄之進の背後から斬りかかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

――

「――――！」

「どうかしましたか？黒崎殿。早く帰らねば…」

突然歩みを止めた明良に孝之助は怪訝な顔をして、明良を見た。

明良は、険しい顔をして、押し黙ったままだ。その顔はかつて戦場にいた時の兵士の顔に戻りつつあった。

「――――れか！」

何処からか悲鳴が聞こえた。後ろの方だ。

「孝之助！これ頼む！」

孝之助に葱と豆腐の入った桶を押し付けると、疾風の勢いで、もと

来た道を戻っていった。

「あ！黒崎殿！もう！」

慌てて孝之助も明良を追うが、既に明良の背は小さくなっていた。
無理も無い、当時の武士はみだりに走らない。
走る姿は余裕が無くみっともないと考えられてきた。そして、刀を下げていた事により現代的な走り方が難しかったのだ。

全力で、明良は夕闇の江戸の町を走る。履いていた雪駄が脱げたがそんな事はどうでもよかった。

「！！」「ひゃあ！」

角から米俵を積んだ大八車がでてきた。車を引いていた男が驚きで固まった。

（くっそ！！避けられねぇ！）

ダンッ！！！

車の縁に足をかけるとそのままの勢いで飛び越えた。

「すまない！」

一言わびると、わき目も振らず走り続けた。後ろでは大八車を引いていた町人が呆然と明良の背を見ている。

遅れて孝之助がやってきて、町人に問いかける。

「すみません！今此処を背の高い武士が通りませんでしたか？！」

「あ、ああ、今おれっちの大八車を天狗みてぇに飛び越えてこの先に走って行ったよ。たまげたねぇ。あんなに急いでどこへ行くんだか。」

「ありがとう！」

孝之助は町人に礼を言うと走り出した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「き、貴様！何者ぞ！」

だんだん声がはっきりと聞こえてきた。

（近いな。この先か・・・）

明良は走るスピードを上げた。

曲がり角を曲がると、１２，３メートル先に二つの影が争っているのが見えた。片方は刀らしきものを持っている。もう一人は斬られたのか、肩を押さえてうずくまっている。

刀が男に向かって振り降ろされようとした。

（くそ！しゃあねえ！まにあえ！！）

明良は手近にあった、拳大の石を拾うと、野球のピッチャーよろしくぶん投げた。

ガツン！と嫌な音がした。

凄まじい速度で飛来した石飛礫は、辻斬りに見事ヒットした。

「うっ！！」

石は辻斬りの首部分に当たった。一瞬くぐもったうめき声を上げ、身を翻して逃げ出した。

（当たったか！）

続けて追跡しようとした明良だったが、はた、とけが人のことを思い出し、あわてて駆け寄った。

「大丈夫か！おい！傷見せろ！」

雄之進が震えながら明良を見た。酷く青ざめている。

「あ、あんたは…さっきの…」

明良も雄之進と気づいたが、怪我の治療が先と思い問いかけに答えなかった。

傷は肩から背中に及んでいた。かなり酷いかと思ったが、死に至るほどのケガではなかった。それは奇跡に近かった。

斬られる直前、鼻緒が切れたのだ。それで態勢を崩したのが功を奏

し、浅手ですんだのだ。
雄之進の顔色は紙の様に白かったが、斬られたときのショックと恐怖によるものが大きかったようだ。
着物を片肌脱ぎにさせ、明良は自分の袖を引きちぎり、傷口に当てた。
「わ、わしは死ぬのか…？」
「こんな傷で死ぬかよ！私だってな、昔9ミリ弾を背中に5発食らった事があったが死ななかった。だから大丈夫だ。」
力強い言葉に安心したのか、はたまた緊張の糸が切れたのか、その目からぼろぼろと涙をこぼした。傍若無人の黒柄党の頭領の姿はもはや微塵も無く、年相応の少年の顔だった。
「怖かったよな。もう大丈夫だ。もう悪いやつはやっつけたからな。」
安心させるように明良は雄之進の背中をさすった。

辻斬り2

「黒崎殿！大事ありませんか？！」

だいぶ遅れて孝之助がやってきた。その後ろから孝之助が呼んだのか、岡っ引きらしい男達が数人駆けて来る。

年嵩の眼光鋭い男と、若い男が2人だった。いずれも一筋縄ではいかないような面構えである。

「辻斬りがでた！侍風の男だ！それと負傷者がいる。早く治療を。」

明良は大声で男達に呼びかけた。

「おい、留松！田嶋の旦那を呼んできねぇ！久次、お前ぇは医者だ！」

「合点だ！」

年嵩の男によばれた若い男たちが犬の様に走っていった。

留松たちの後姿を見送った後、年嵩の男が鋭い目で明良を見た。

「あっしは神田八軒町の勘七と申しやす。」

勘七は背から十手を取り出すと、自分が北町奉行所の同心・田嶋玄右衛門から手札を貰っている岡っ引きだと説明した。

「すいやせんが。旦那、さっき起こった事をできるだけ細かく話していただけませんかね。」

明良は素直に孝之助と家に帰る途中で、悲鳴を聞いたので駆けつけた事と、遠くから石を投げて辻斬りを撃退した事を話した。

「旦那は辻斬りの顔を見てはいねぇんですね？」

「距離もありましたし、後姿だったので残念ながら顔は見ていません。」

「そうですかい。んじゃあ、こちらの旦那の方が辻斬りの面を見てるかもしれないって事ですな。」

勘七がまだ放心している雄之進を横目で見ながら言った。雄之進はまだショックから抜け切れておらず、顔は青ざめ、震えている。

「それはそうですが、今は喋れる状態じゃないと思いますよ。恐怖と怪我のショックで混乱している。」

明良の言葉を無視して、勘七が雄之進に話を聞こうと近づき、驚い

たような声を上げた。

「こりゃあ、有馬様のご次男さまじゃあありませんか。そうなると、もしかしたら俺達町方じゃあ手が出せなくなっちまうかも知れねぇ。」

「なぜですか？現に何人か殺されているんでしょう？」

明良の問いに勘七は溜息をつきながら、

「旦那、辻斬りがただの浪人や盗人なら話は早ぇ。ふんじばってお裁きを受けさせるだけだからな。だが奴がどこぞの家中の侍となっちまうと、話は別だ。俺達町方は手を出せなくなっちまう。侍の始末は侍でつけなきゃならねぇのよ。」

「そうなんですか。なかなか管轄が複雑なんですね。」

明良は正直な感想を述べた。

「そういやぁ、旦那のお名を聞いていませんでしたね。申し訳ありやせんが、これも御用で必要なんでね。」

「私は黒崎明良と申します。いまは、神田明神近くの安藤勇志郎さ

んの御宅でお世話になっています。ちなみにこちらは勇志郎さんの弟さんです。」

「安藤孝之助と申します。」

自己紹介をしているうちに、留松と久次が戻ってきた。

久次が連れてきた医者は手早く雄之進の傷を診始めた。

留松の後に続いて北町奉行所の定廻り同心、田嶋玄右衛門が現場に着いた。かなりの距離を走ってきたと思われるのに、涼しい顔をしている。歳は三十半ば。常に外に出ているため、顔は日に焼けているが、それが逆に精悍さを醸し出している。髷を小銀杏に結い、着流しに紋付の黒羽織を粋に着こなしていた。

「北町定廻り同心、田嶋玄右衛門だ。」

言葉少なに、田嶋が自己紹介をしたあと、勘七に報告を促す。

粗方報告を聞いた後、田嶋は明良に向き直り言った。

「黒崎さんよ、ちっと話を聞きてぇ。この近くの自身番まで来てくれねぇか。もちろんむこうの次男坊も一緒だ。」

「わかりました。孝之助君、先に戻っていてくれないか。せつさんたちには心配ないと伝えておいてくれ。」

孝之助は心配そうな顔をして、逡巡したが、素直に頷いた。

「子供の一人歩きは危ねぇ。久次に送らせよう。」

その会話を聞いた玄右衛門が提案し、孝之助は久次に送られてこの場を後にした。

お調べ

自身番に着くと、田嶋は狭い板の間に腰を下ろし、座るように進めた。明良も続いてその向かいに座る。

後から勘七と留松がケガの応急処置をされた雄之進が腰を下ろすのを手伝っていた。

「さて、黒崎殿だったかな。先刻の辻斬りについて覚えている事を話して欲しいんだがな。」

どっかりと胡坐をかいた田嶋が明良の目を見据えて聞いた。

「先ほど親分さんに言ったとおりです。背丈は高め、笠を被っていたし、後姿だったので顔は分かりません。投げた石がまぐれで当たっただけでも幸運でした。」

本当は１００％当てる自信があった。昔は４０ｍ離れた的に榴弾を投げる訓練を嫌というほどしていたのだ。

田嶋は明良の考えを見透かそうと睨む様に話を聞いていたが、やがて納得したらしく、目線を雄之進に移した。

「おう、留、まだ有馬の次男様は喋れねぇのかい？」

留松は震える雄之進の背中をさすったりしていたが、まだショックから立ち直れてないようであった。

勘七が粘り強く聞き出そうとしていたが、お手上げとばかりに田嶋に答えた。

「旦那、ずっとこんな調子で…まだ一言も喋っておりやせん。」

田嶋は頭をかきながら「全く…旗本の武士が情けねぇったらありやしねぇ」と呟いた。

未だに雄之進は田嶋の問いにも震えるばかりで一言も答えようとしなかった。

その様子を見て、明良は田嶋に提案した。

「あの、私が話を聞いてみてもいいですか？」

「あんたが？」

「はい。今彼は恐怖によるショックでパニックを起こしています。以前、このような症状に陥ったの者を見た事がありますので、もしかしたら何とかなるかもしれません。」

明良の言葉を聞いた3人は、聞きなれない言葉に目を白黒させた。戦場で過酷な体験をした後にＰＴＳＤやパニック障害に苦しむ兵士達は後を絶たない。

明良は当時医療班にいた顔見知りのシノザワという衛生兵に少しだけ接し方を教わっていた。彼は精神科医を目指していたが、大学を卒業と同時に兵役を志願した変わり者だった。

『なあシノザワ、戦闘中にパニックを起こして動く事もできなくなった奴に、銃を撃たせるにはどうしたらいい？』

『なんだクロサキ、珍しいな。そんな事聞くなんてよ。』

『昨日の作戦、バディになった新人のヤローが敵地のど真ん中でビビリやがった。おかげでこっちが死ぬ思いをする羽目になったからだよ。』

シノザワは手に持っていたコーラを一口飲んで笑った。

『おまえだったら、鼻っ面をぶん殴って『3秒以内に走らないとそ

の脳ミソを吹っ飛ばすぞ！』なんて言っただろうな。』

『よくわかったな。何回かぶん殴ってようやく動いたよ。まったくクソの足しにもならねぇ。』

『それじゃあだめだ。余計恐怖をあおる事になるんだよ。男っての
は意外と繊細なのさ。みんなが皆お前みたいに図太ければいいんだ
がな。』

『なんだコノヤロウ。撃ち殺しちゃうぞ！』

『まあまてよ、このこつはな…』

（あれは…どうやってやるんだっけな…）

明良が記憶を手繰り寄せていると、

「旦那は蘭学のお医者なんですかい？」

傍にいた勘七が聞いた。

「いえ、あ、まあ少しは医療の知識はありますが…」

しまったと思い、明良は言葉を濁した。今は江戸時代だ、英語なん

て一般人が分かるわけがない。
弾みで言ってみたものの、本当は成功する自信など無かった。
（言わなきゃよかった…）
「まあ、論より証拠だ。黒崎殿、やってみてくれねぇか。」
田嶋の一言に明良は意を決した。
「…わかりました。できるだけやってみます。」
明良は雄之進に向かい合うように座った。
「とりあえず、落ち着いたほうがいい。これを飲みなさい。温まるから。」
留松が煎れた茶を差し出した。
雄之進の震える指先が湯飲みを掴もうとするが、中々力が入らないようだった。
明良が自分の手を添え、何とか湯飲みを掴む事ができた。
ゆっくりと雄之進が茶を飲み干すと、少し震えが収まった。
「大丈夫か？少し落ち着いたかな？」

「あ、ああ。大丈夫だ。」

「じゃあ、嫌な事を聞くかもしれないけど、答えられるかな？先ほどの辻斬りの顔をみたかどうか。」

明良はあくまでもゆっくりと穏やかに話しかけた。

「う、うむ。」

そう答えるものの、そこから先が答えられない。だが、明良は辛抱強く待った。

田嶋たち三人は一言も聞き漏らまいと息を殺して聞き入っている。

「どうしても辛いなら無理に思い出さなくてもいいんだ。大変な出来事だからね。」

「いや、大丈夫じゃ。」

雄之進は大きく溜息をつくとそのときのことを語った。

「薄暗くて顔まではよく分からなかったのだが、かなりの遣い手であった…あ、あの時奴が怯んだ時に少しだけ顔が見えたのだ。顎は細く、右顎下に傷のようなものが見えた気がするのだ。わしが思い出せるのは此処までだ。すまぬ。」

意気消沈したように雄之進が頭を下げた。

（あの、悪（ワル）でどうしようもなかった黒柄党の頭がこんな素直になるたぁなぁ。）

田嶋は雄之進の今までの素行を知っていただけに驚きを隠せなかった。

「いいんだ。こちらこそ辛い事を思い出させて悪かったね。ありがとう。」

明良がそういうと、

「わしの方こそ先だってはあんな無礼を働いたのに、命まで救われて…すまなかった。そして礼を言う。」

雄之進はまっすぐに明良を見据えて言った。

（ほう、本当は根は真っ直ぐないい子かもしれない。やはり、周りの環境が鬱屈の原因を作っているのかもな。）

「田嶋様。これでよろしいでしょうか。」

いきなり声を掛けられたので、茶を飲んでいた田嶋は咽てしまった。

「げっほ、あ、ああ上出来だ。調べはここまでにしよう。有馬殿、また何か分かりましたら、八丁堀までお願いします。」

田嶋は、差料を腰に差すと、勘七と留松とともに自身番を出て行っ

た。

そして残された2人だったが、まだケガで満足に動けない雄之進を一人で帰らせるわけにはいかない。

（しかたない。家まで送っていくか。厄介ごとに首を突っ込むところくな事がないって言うのはどの国でも一緒だな。）

「おい、送っていってやるから、ナビ…じゃなかった案内しろよ。」

そういうと明良は手を差し出した。

帰り道にて

自身番での調べを終えた北町奉行所定廻り同心田嶋玄右衛門は、岡っ引きの勘七とその下っ引きの留松と久次を引き連れ、奉行所へ引き上げようとしていた。

空には既に月が昇っている。勘七は自身番に詰めていた大家から借り受けた提灯をさげ、先頭を歩いていた。

「すっかり遅くなっちまいましたね、旦那。」

月を見ながら勘七が言った。

「ああ、島倉様からくどい小言を喰らう前にさっさと帰るぜ」

島倉というのは、北町奉行所年番方与力、島倉宗助の事である。与力の地位は同心の上であり、田嶋の上司に当たる。

島倉は年は五十半ば、現場よりも体裁を重んじるという、典型的な役人（公務員）体質の男で、常に現場一筋で、たびたび掟破りすれすれの捜査をする田嶋の事を疎ましく思っているようだった。田嶋も島倉とは最初からそりが合わなかった。

後ろで留松と並んで歩いていた久次が

「それにしても、あの黒崎って浪人者、何者ですかね。あんなに震えて声も出なかった有馬の次男様からすらすら証言を引き出したんだから、たいしたお方だぜ。」

と感心したように言った。

それは田嶋もずっと考えていた事だった。浪人だという割には腰には脇差すら差さず、髷も結わず奇妙なざんばら髪だった。また町人の身分である勘七や留松に丁寧に受け答えをしていた事にも驚いた。今までたくさんの人間に出会ってきたが、侍でも町人でもない雰囲気の明良は異質なものに感じた。

（嘘を言っている風でもなかった。だが、侍とも思えねぇ。おかしな野郎だ。）

まだその違和感が何か分からない。田島は後ろを歩く若い下っ引き達に顔を向けた。

「下手人の手がかりはつかめた。顎に傷がある浪人体の武士だ。明日からまた洗いなおすぞ。」

田嶋は思考を正体不明の自称浪人から、辻斬り事件に切り替えた。分からないものを考え続けていても時間の無駄だ。

田嶋の言葉に若い久次と留松が勢いよく返事をした。

（今日は早めに休むか、島倉の爺の小言を喰らってからな。）

足取り重く田嶋は奉行所の門をくぐった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ぼんやりとした月明りの下、明良は雄之進の体を支えながら歩く。
時折傷が痛むのか雄之進の体がふらつくが、明良はしっかりと支えながら、ゆっくりと足を進めていた。

「この先の角を右だ。」

「はいよ了解。やっぱり背中に乗った方がいいんじゃないのか？」

「ふざけるな。武士が背におぶさる事などできるか！」

「あっそう。まあいいけどな。」

田嶋たちの調べが終わった後、送っていくという明良の申し出を雄之進は頑なに拒否していたが、

「そんな体でどうやって帰るんだよ。今のお前だったらその辺の野良犬にも殺されちゃうぞー。痛いぞー。生きたまま食い殺されるのは。」

その言葉に若干顔を引きつらせながら、半ば脅迫に近い申し出をしぶしぶ受ける事にしたのだった。

暫く無言の時が流れる。二人分の足音が夜の街に響く。

「……なぜ、わしを助けたのだ？あんな無礼を働いた後だというのに。」

ポツリと雄之進がつぶやいた。
明良は「んー？」と考えるように唸った。

「それはそれ。これはこれ。さ。もうこんなつまんねぇ遊びするんじゃねぇぞ？わかったか？坊や。」

「坊やだと！？侮辱する気か貴様！」

「あれー？命の恩人は誰だったかなー？」

「うぐ…」

雄之進が言葉に詰まると、明良は苦笑した。

「…まぁ、若いときはやんちゃでしょうがねぇよな。私もそうだったし。今度暴れたいときは私が相手になってやるぜ。まあお前みたいな生まれたてのヒヨコちゃんに負けるわけがねぇがな。」

その言葉を聞いたとたん、雄之進の目に力強い光が戻る。

「何と小癪な！貴様より強くなるぞ！わしは！」

「はいはい。わかりましたよ。何度でもぶっ飛ばしてやっから。」

「うるさい！絶対に貴様を倒してやるからな！」

「いや、もう近所迷惑だから。黙れこのヤロウ。」

「貴様！武士を愚弄するか！」

「うるせえから！耳元で怒鳴んな！」

騒々しい二人の声が夜の江戸の町に響いていた。

帰り道にて2

闇の中に、ぽつんとひとつ、提灯の明かりがゆらゆらと揺れていた。
提灯を持つ男は、ひどく苛立った様子で闇の中へ向かって話しかけている。

「……何としたことか。よもや貴殿が仕損じるとは。」

ざわり。

「…っ！」

そう話しかけた途端、凄まじい殺気が闇の中から溢れ出た。
男は、真っ暗な闇の中の空気が、刃のように鋭くなり、自分に向かって牙をむいている錯覚に囚われた。

「……金は要らぬ。今回は邪魔が入った…次は必ず仕留めよう…」

低く、底冷えするような声が響いたかと思うと、刃のような殺気と共に闇の中の気配は消えた。

「……時代遅れの『血狂い』がっ」

男は顔中の冷や汗を拭う事もせずに、ただそれだけを吐き捨てた。

――――――――――――――――――――

「ここだ。ここでよい。」

雄之進は急に歩みを止め、明良の手から離れた。

暗くて表情が読めないが、先ほどとは違い、明らかに沈んだ声音だった。

「おい！…何だってんだ…」

「おい！其処の者！」

フラフラと歩き出そうとした雄之進を見かねて声を掛けたときだった。

家紋の入った提灯を提げた武士が二人、明良たちの前に立ち塞がった。

（シルエットからして右側は痩せ型１７０センチくらいか…左は…でかいな、１８０はある。二人ともかなり鍛えられてるな。あとは距離が近すぎる。背を向けて走り出すまでにバッサリやられる方が早いか…）

明良は一瞬にして自分の置かれている状況を冷静に分析する。幾度

の修羅場を潜り抜けた兵士だからこそなせる業だ。
（油断した隙を突いて一気に逃げるしかねぇな。）
そう結論付け、二人を見据える。
「このような夜更けに、屋敷の周りをうろつきおって…返答次第ではただでは帰さぬぞ！」
「ちょ！！何でそんなに殺気立ってんの？！」
思わぬ成り行きに慌てる風を装う明良。だが雄之進は沈黙を通していた。
「……」
「おい！何とかしろよお坊ちゃ…」

「…わしだ。今帰った。」
「！！！！」「若！！？」
「は？」
二人の武士の驚きの声と明良の間抜けな声が通りに響いた。
それから、二人の武士の態度は一変した。

「このような刻限まで出歩いて！心配したのですぞ！」

明良の存在に気が付いていないのか、反抗期の中学生の子供を持つお母さんの様に雄之進を叱る右側の武士。左側の武士はその父親の様に黙って雄之進を見つめている。

当の雄之進はそっぽを向いて黙っているだけだった。

「（なにこの雰囲気）あのスイマセン…お母さｎ、じゃなくて、実は彼、先ほど辻斬りに遭いまして、肩に怪我を負っています。止血はしましたが、早く手当てをしたほうが…」

「だめだ！言うでない！！！」

雄之進の制止もむなしく明良の言葉はばっちり届いていた。

「なんですと！？怪我をした？！なぜ早く言わないのですか！！！」

「早く医者を！！！」

あからさまにオロオロする二人。

「静かにせい！わしに喋らせぬか！」

驚くほどの慌てぶりに見かねて雄之進が一喝した。

「……命にかかわる傷ではないわ。取り乱すでない。辻斬りに斬られそうになったところを其処なる者に助けられたのだ。それに町方

の調べもあってここまで遅くなった。」

「左様でしたか。若を助けていただき、誠にありがとうございました。」

二人の武士は深々と頭を下げた。

「あ、いいですってそんな。偶々通りかかって良かったですよ。じゃあ、私はこれで。じゃあな。お坊ちゃん、あんまり心配掛けんなよ。」

「大きなお世話じゃ。」

「恩人にそんな事を言うものではありませぬぞ！申し訳ありませぬ。御名だけでも教えていただけませぬか…？」

「黒崎明良です。今は神田明神近くのお宅に居候させてもらってます。」

「某は若の世話役を務めております、秋本秀次郎ともうします。先程のもう一人は某と同じく世話役の近藤仁左衛門でございます。黒崎殿。必ず後日お礼に伺いまする。」

「黒崎。次は必ず貴様に勝ってやるからな！」

近藤に連れられていった雄之進の声が木戸の裏から聞こえてきた。

またそんなことといって！ほら！手当てしますから…

そんな会話を尻目に明良は「は、ははは…」と微妙な笑いを浮かべ、

「大変ですね…」
と秋本に言った。

「一番難しい年頃ですからな…。数年前までは本当に素直で、「しゅう、しゅう」と某の後ろをいつも付いて回られていたのですが…」

「あ、そうデスカ…」

明良は遠い目をして

（もうなんか、早く帰ろう）

そんな事を思った。

家族の肖像

安藤邸の目の前まで来ると、小さな明かりと人影が見えた。

勇志郎だった。帰りが遅い明良を心配し、外で待っていたのだ。

だいぶ暖かくなったといっても、夜は冷え込む。吐く息が白かった。

「……ただいま。」

懐に手を入れて、うつむいていた顔がはじかれたように上がる。

「黒崎殿！大丈夫なのですか！？孝之助から聞きました。辻斬りにあったと…」

「あ、怪我とかは全然してないから。その後のいろいろがくたびれただけ…」

「心配したのですぞ！！こんなに遅くまで！！！」

いきなり声を荒げた勇志郎に、明良はきょとんとした顔で勇四郎を見た。その顔はいつもの精悍な顔つきではなく、どこにでも居る娘のような表情だった。

「…黒崎殿。あなたはどんなに強くても女子（おなご）です。このような夜更けまでふらふらと出歩かんで下さい。」

勇志郎は声を荒げたことを恥じるように目をそらした。

「……くくく…」

明良のほうから押し殺した笑い声が聞こえた。

「く、黒崎殿…？」

「あはははははは！」

勇志郎が問いかけた瞬間、明良の笑い声が夜空の下に響き渡った。

「な！何が可笑しいのですか！」

「あはは。ごめんごめん。さっき辻斬りから助けた奴を家まで送って行ったら。全く同じ様なことがあってね。まさかあたしが体験するとは思わなかったからさ。」

「けれどそんなに笑うことはないでしょう…」

勇志郎が不貞腐れたように言った。

「ごめんって。それにね、こんなに心配されるのは弟以来でね、嬉しかったよ。ありがとう。」

明良のいつもとは違うきれいな笑顔に、勇志郎の頬が熱くなった。

「うー寒い！早く入ろうぜ！入ったら、飯の前にせつさんのお小言を食らいますか！盛大に！」

そんな勇四郎を残して、明良はさっさと家の中に入っていった。

当の勇志郎は顔を赤くしたまま、しばらく佇んでいた。

――――――――――――――――――――

「…黒崎殿。」

玄関を入った瞬間、静かな、しかし明らかに怒気を帯びた低い声が聞こえ、顔から脂汗が噴出した。

上がり框に安藤せつは静かに佇んでいる。その後ろで、孝之助が心配そうに顔半分を覗かせていた。

（やばい…これめっちゃ怒ってる。）

だらだらと汗を滴らせた明良は、ぎこちなく足を進める。

（これは早く謝らないとホントやばい。）

そう思った矢先、せつが口を開いた。

「私が申したことを聞いておられましたか。」

「はい。聞いてました。」

「なんと申しましたか。」

「目立ってはならないと…」

「そう申し上げましたね。」

「…ハイ。スイマセン。」

「では、なぜ辻斬りなどと対峙したのですか！ひとつ間違えばあなたが危なかったのですよ！」

「え？あ、そっちですか。てっきり道場で暴れたことかと…」

「そんなことを申し上げているのではありません！」

いつもと違うせつの声に明良は言葉に詰まる。

「…取り乱しました。お疲れでしょう。夕餉の膳はそのままにしております。もう、お休みくださいませ。」

うろたえた表情を隠すように、せつは自室に戻ろうとした。

「せつさん。」

明良の言葉に、せつの動きが止まった。

「道場で暴れたのは自分の落ち度です。そしてあの時、辻斬りに殺されようとした人を助けたのは、まったくの自己満足です。自分でもそう思います。ひとつ間違えば孝之助さんを危ない目に合わせたかもしれない。大変申し訳ありませんでした。」

明良は深く頭を下げた。

心なしか、せつの背中が少し震えたような気がした。

「…あなたは正しいことをしたと思います。ですが…」

「え？」

震えるような小さな声は明良の耳に届かなかった。

「…もう、お休みくださりませ。」

そういってせつは奥の間に姿を消した。

後には重苦しい沈黙だけが残った。

家族の肖像２（前書き）

更新が遅くて申し訳ないです。ちょくちょく前の話も手直ししていくかもしれません。

家族の肖像2

せつが消えた廊下を暫くぼんやりと眺めていたが、勇志郎の視線に気づくと、

「どうやら相当怒らせてしまったみたいだ。」

とばつが悪そうに笑った。

「…黒崎殿が悪いわけではないのは母も解っているはずです。ただ…まだ傷が癒えていないのです。」

勇志郎がぽつりと呟く。

「傷？」

「ええ…心の傷です。」

「……そうか。」

明良はそれ以上聞こうとはしなかったが、勇志郎は続けた。

「黒崎殿…。夕餉の後、少しお時間を頂いてもよろしいでしょうか。…お話したいことがあります。」

「ああ…。それは構わないが。」

勇志郎はほっとしたというように笑みを浮かべ、自室へ戻っていった。

ひとり玄関に残された明良だったが、いい加減腹が減ったということもあり、早く部屋へ戻ろうと足元をみて、はたと止まった。

「あ、ワラジ忘れてきた。」

先刻の騒ぎで全力疾走した際に草鞋を脱ぎ捨て、足袋裸足のまま走り続けたため、足元は悲惨なほど泥だらけだった。

「このまんまじゃ上がれないなぁ。」

なんて能天気に呟いたら、呆れた声が返ってきた。

「暢気に言ってないで、早く足袋を脱いで足を洗ってください。そのままで上がられたらたまりませんから。」

孝之助が奥から湯を張った盥を運んでくる。

「おー、幸之助君。さーんきゅー！」

泥でべしゃべしゃになった足袋をやっとこさ脱いで、温かい湯に足を浸ける。

「うあー、生き返んなぁ。」

明良が足を洗っていると、脇でずっと黙っていた孝之助が口を開いた。

「黒崎殿。お願いしたいことがありまする。」

その声は、どこか思いつめたような声音だった。

「ん？どうしたんだよ改まって。」

明良が覗き込むと、孝之助が切羽詰ったような目で明良を見つめてきた。

「あの体術を私に教えてください。お願いします！！」

「だめ。」

明良はにべもなく言った。

「何故…何故ですか！」

「お前にはまだ早い！…なんつってな。だめなもんはだめ。」

「からかわないでください！」

孝之助が声を荒げると、明良の表情が一転して鋭い目つきに変わった。

「じゃあ、何故教わりたいんだ？」

「それは…強くなりたいからです。」

「強くなってどうしたいんだ？お前は。」

「それは…」

「やめておけ。お前みたいなチビじゃあ、どっちみち無理な話だ。」

口ごもる孝之助にかけられた言葉は、普段とは違う冷たい言葉だった。

「っっ……申し訳ありませんでした。忘れてください。」

「……」

孝之助はそう言うと、盥を持って小走りにその場を離れた。

悲しそうな顔でそう呟いた孝之助の顔は、明良の目にいつまでも焼きついていた。

『……今度はいつ帰ってくるの？ハモニカを教えてくれるって言ったじゃないか！』

『……ごめんな。次に帰ったとき、必ず教えてやるから。』

『…ほんと？ほんとに？じゃあ約束だよ！』

遠い昔に交わした会話が、脳裏に蘇った。戦場へ向かう明良をさびしそうな顔で見送っていた幼い弟。

幼いながらも、明良に心配をかけまいと精一杯強がっていた。その顔を見るたび、明良は罪悪感に苛まれていた。

さびしそうな孝之助がの目が、弟の雪人（ゆきと）に重なって見えた。

「……」

辛そうに顔をゆがめ、膝をついた。

「…すまない。すまない！何故だ…。どうして私が生き残ったんだ…」

痛々しい声が、暗い廊下に吸い込まれて消えていった。

家族の肖像３（前書き）

長らくお待たせしてしまい申し訳ありません。こんな素人話を読んでくださっている方々に感謝いたします。
以前の話を大分焼き直しました。
これからもちょいちょい直していくやも知れませんので、お待たせしてしまうかも知れません。申し訳ありません。

家族の肖像3

明良は夕餉を手早く済ませ、勇志郎の部屋の前にいた。いつもの癖でノックして入ろうとするが、障子戸が壊れそうだと思い直し、声をかける。

「おい。入るぞ」

「ああ、お待ちしておりました。どうぞ。」

無遠慮に障子戸を開き、勇志郎の目の前に座る。せつが見たら青筋を立てて説教をしそうな態度だが、勇志郎は何も言わなかった。

行灯の頼りない灯りが明良と勇志郎の頬をゆらゆらと照らす。油の燃える匂いが鼻を突いた。

「話ってのは何だ？」

「こんなことを黒崎殿に話すのも何でしょうが、私の弟の事なのです…」

少し話していいものか戸惑うかのように勇志郎が続ける。

「今、奥村道場で剣術の稽古をさせているのはご存知かと思いますが、最近、しばしば稽古を休んだりすることがあるのです。前はこんなこと無かったのですが、だんだん口数も減っていて、私が聞いても何も話したがらないのです。道場で何かあったのではないかと思いまして…。」

身内の恥を晒すような話でお恥ずかしい。と勇志郎が取り繕うように言った。

「いや、気にしなくていい。…今日道場であったことは聞いたのか？」

「あ、はい。大体は。黒崎殿が道場破りを素手で倒したと。黒崎殿は師範代の次にお強いと興奮気味に話しておりました。」

「次かよ…まあいいや。」

ちょっと釈然としなかったが、そのまま聞いていた。

「黒崎殿みたいに強くなりたいと。しきりに言っていたのですが、私が怪我は無いのかと聞くと、そのまま黙ってしまいまして。」

「……」

「何かされたのかと言ったら、私には関係ない、放って置いてくれ…と。」

あの若侍が言ったことを明良は勇志郎に伝える気はなかった。兄には黙っていてほしいと言われたからだ。

「…なあ、勇志郎さん。」

黙って聞いていた明良がようやく口を開いた。

「こういうことを部外者の私が言うのは何かもしれないが、これは、孝之助君個人の問題だろ？私らがごちゃごちゃ言っててもも根本の解決にはならねぇんじゃないか？」

「…私は、孝之助が不憫でならないのです。」

勇志郎がやっと聞き取れるほどの声で呟く。

「孝之助には、苦労ばかりかけてきました。私が御役にも就かず、日庸取りで働いていることに同輩の子らから苛めを受けていたこともありました。以前通っていた道場をやめ、今の道場に通わせた事で少しは落ち着いたようですが…本当は…」

「……あんたの弟は、あんたが考えてるよりずっと強いぜ？」

「…え？」

「だから。心配することはないさ。…ただ、あいつが本当に折れちまったのなら、ちゃんと歩けるように背中を押してやればいい。」

「……。」

「あんたは…いい兄貴だよ。あたしはそうなれなかった。」

明良は眩しそうに勇志郎を見た。

「黒崎殿も、ご兄弟がいらっしゃるのですか？」

「いた…っていうのが正しいかな。もういない。」

「！…それは……」

「いいよ、そんな顔しなくて。……後悔してるんだ。私はちゃんとあいつと向き合ってやれなかった。最期まで。」

「…え？」

勇志郎が聞き返そうとする間もなく、明良はその場に立ち上がり、入り口に向かっていた。

「いんや、独り言だ。だから、もうちょっと見守ってやれよ。壁にぶつかることなんて人生にはいくらでもある。」

「…黒崎殿に話して、幾分か心のつかえが取れたような気がします。ありがとうございました。」

「…明良でいい。苗字で呼ばれるのは何か慣れない。」

「あ、え？わ、わかりました。あ、明良殿。こんな夜分にお引止めして申し訳ない。」

「うーん…まあ、いいや。」

「私の事も…勇志郎とお呼びください。明良殿だけではずるいです。」

普段は見られない少し拗ねた様な勇志郎の態度に、明良は笑みを浮かべた。

「オーケイ。わかった。……勇志郎。」

「は…はい。」

いきなり呼び捨てで呼ばれ、声が上擦る。

「お休み。いい夢を。」

そう言い残すと、明良は部屋を出て行った。中には少し顔を赤くした勇志郎だけが残された。

朝日の中で

紺色の空がだんだんと白み始め、1日の始まりを告げるように、庭で飼われていた鶏がけたたましい声を上げた。

江戸の朝は早い。いつも朝日が昇らぬ七つ半から、蜆や納豆を売る棒手振りの張りのある声が響く。だが、今は七つ時。午前四時ごろだ。

もう一度、今度は耳元で鳴ってるかのように、はた迷惑な騒音が直撃した。この時代に来てから目覚ましはいらなかった。

「うるせ……いつかフライドチキンにしてやる。」

暖かい夜具からのっそりと起き上がる。ぼさぼさの髪をぐしゃぐしゃとかき回し、恨めしそうに外へ目を向けた。

この時代に来て10日が経った。元の時代に帰る方法は未だ見つからない。

このまま戻れなかったら…という懸念が頭をよぎった。もしもそうなったら、自分はどうすればいいのだろう。

守るべき友軍も、倒すべき敵もいない。自分の存在する理由は？

砂塵と鋼鉄の雨が飛び交う戦場を酷く懐かしく感じた自分に戸惑う。

――――お前達は、猟犬だ。狩場以外では生きられん。

遥か昔に言われた言葉がよみがえった。

忌まわしい記憶。封印された記録。

――――引き金を引け。ナイフを突き立てろ。貴様らの前に立ち塞がるものは全て敵だ。

身体が、熱い。

『クソッ！！！！』

この時代に来てしばらく使わなかった下品な単語で悪態をつくと、終わりのない思考の連鎖を断ち切るように外へ出た。

深く息を吸うと、濃い緑の匂いが鈍った頭を覚ましていく。朝日は

まだ昇っていない。

井戸に近づき水を汲もうとしたとき、誰かの気配を感じた。

「…？」

足音を殺し、井戸の反対側を確認する。

「一…二…」

苦しそうな声で、腕立て伏せをする孝之助がいた。ただ、やり方が少し覚束無い。

「七…うううう」

七回目で力尽きたように倒れた。

あの時、明良が道場で若者たちを完膚なきまでぶちのめした瞬間を見ていた孝之助は、

自分も強くなりたいという一心で、明良に教えを請うたが、断られた。だが、諦める事ができず、試行錯誤しながら自分なりに努力を続けていたのだった。

ただ我武者羅に己を苛め抜くその姿が、以前の自分と重なって見えた。

明良は思わず声をかけていた。

「ずいぶんと早いな。トレーニングは感心だが、自分の体力の限界を知った上でやらないと怪我の元だぜ。」

孝之助は驚いて体を起こした。恨めしそうな目で明良を見る。

「あの時からずっと続けてたのか？」

明良の問いに、孝之助が戸惑ったように頷く。

「よし。じゃあ今日から私も一緒にやるから。付き合え。」

「え？」

思わぬ答えに孝之助は一瞬きょとんとする。

「だめか？」

「そ、そんなことないです。」

「じゃあ決まりだな。うーん、今日は腕立てだけにするか。明日はスクワットもメニューに入れるかな。」

そういうが早いか、じゃあ着替えてくるから。先にやっててていいよ。といって自分の部屋に戻っていった。

そのまま固まっていると、すぐに着替えた明良が戻ってきた。上は黒いTシャツに、下は勇四郎から借りた紺の道場袴だった。少し見苦しいが仕方ない。

態勢をとると、「1！2！3！…」と掛け声をかけながら、かなりの速度で腕立て伏せをはじめた。その姿は孝之助には何故かとても格好良く映った。

瞬く間に3セットを終え、苦々しげに呟く。

「だめだな、かなり鈍っちまった…あ。そうだ。」

何かいたずらを思いついたときのようにニヤリと笑った。

ちらりと孝之助を見ると、

「孝之助くーん？ちょっと手伝ってくれるかなー」

「何でしょうか？」

「背中の上に乗ってくれ。」

「ええ！？で、できませぬ！そんなこと…」

「いいから！！」

結局押し切られ、孝之助はしぶしぶ明良の背中に乗る。

「よし、これでいい。」

「お、重くないですか？」

心配そうに孝之助が問いかける。

「だーいじょうぶ、ぜんぜん平気。」

肘に負担がかかるので、今度はゆっくりと体を沈める。

ゆっくりと上下する上半身は、男と違い線は細いが、「か弱い」「たおやか」等という単語とは全く無縁なほどに鍛えられていて、所々古い傷跡が残っていた。戦いの中で生きてきた兵士の肉体は、子供一人分の体重ではビクともしなかったが、孝之助は負担にならないようにできるだけ動かずにいた。

「お前は、根性があるよ。」

唐突にそんなことを言われて、すこし動揺する。

「だから、頑張れよ。」

「…はい！」

たった一言の不器用な言葉。だが、孝之助にとってはそれが嬉しかった。

「…あとな、」

「え…？」

「お前の兄貴は、誰よりもお前を思ってる。いい兄貴を持ったな。」

「！……はい。」

暖かい雫がぽろぽろと自分の背中に落ちるのを感じて、明良は静かに笑った。

朝日がいつの間にか2人を照らしていた。

初めてのお留守番（前書き）

大幅に変更しました。前より大分殺伐としてます。すいません。また、直していくかもしれないです。

初めてのお留守番

「御免。」

太陽も少し傾いたころ、玄関から来訪を告げる声が聞こえた。

縁側の柱に背を預け昼寝をしていた明良は、まどろみの中から急速に覚醒した。

右手が気づかぬうちに、何も無い右腿の銃を握ろうとしていた。常に緊張状態なのは職業病だ。

「あれ？誰か来た？せつさーん、せっつさーん。お客さんですよー。」

普段は明良などが呼ばなくても、せつが素早く応対に出るが、いくら呼んでも、間延びした明良の声が家の中に響くだけだった。

「あ、そうだっけ、今日は二人で出かけるとか言ってたような気がしたわ。」

本当は、朝食を食べている時にせつと孝之介に念入りに言われたのだが、明良は平時、食している時は大体無心で食うので、たとえ何か言われても上の空、右から左なのだ。

勇志郎は口入れ屋に仕事を探しに朝から出掛けていたのでいつ帰ってくるかわからない。

「ふぁ～あ、じゃあ出るかー。」

大きな欠伸を一つすると、ガリガリと首を掻きながら面倒臭そうに玄関へ向かう。

「もうし！誰かおりませぬか！」

もう一度、今度は若干大きめな声で呼びかけられる。

「はいはーい。ダレデスカー。」

ひょこりと玄関に顔をのぞかせると、一人の武士が四角い風呂敷包みを持って佇んでいた。

年は二十代半ば、背丈は明良と比べると少し小さいが、この時代の人間にしては高身長の部類に入るだろう。

体つきはがっちりと肩が張り、相当鍛えられていることが判る。顔も役者と見紛う様な男前で、通りを歩いていたら、娘たちは熱っぽい視線を向け、袂に文を入れようとするだろう。

残念ながら、完全な男社会で育った明良には全く効果は無い。美醜にはあまり頓着しないほうだ。

（誰だこいつ。）

ありありと、警戒心を含んだ表情を浮かべるが、相手はパッと明るい表情になった。

「あ！黒崎殿に御座いますな！」

「えあ？はい、そうですけど。」

明良の間抜けな声が玄関に響いた。

「某、秋本秀次郎と申す。この間は若がお世話になり申した。伺うのが遅くなり申し訳ござらん。」

秋本は腰を折ると、些少でござるが、礼の品でござる。と言い、風呂敷包みを差し出した。

「ああ！はいはい。こないだの。いや、そんな気を使わなくてよかったのに。どうもすいません。まあ、上がってください。私の家じゃないですけどね。」

包みを受け取りながら明良は促した。

「失礼いたす。」

（ええと、座布団と、お茶と…）

明良はこの時代に来て、行儀作法というものを人生で初めて学んだ。といっても、今日のために勇志郎の母せつに2日間で叩き込まれたのだ。

今まで一応は上下関係の厳しさは骨身に染みるほど叩き込まれてい

たが、一般的なものとは程遠いものであった。

「その口からタレるクソの前と後にｓｉｒをつけろ！クソ虫共！」

というのが底意地の悪い担当官の口癖だった。

明良のいた所ではそれが常識だったが、此処ではそれが全く持って通用しない。

とりあえず、行儀見習いの商家の娘と比べると、クロマニョン人レベルの明良に最低レベルの作法を叩き込んだせつの苦労は計り知れないものだったろう。

茶の出し方から来客の応対の仕方までを一から十まで教え、何とか形になるまでになった。

「これで、私どもが留守でも大丈夫ですね。」

と言って有無を言わさない迫力をこめた笑みを浮かべたせつの顔を思い出すと冷や汗が出た。

とりあえず、座布団と茶を出すところまではクリアできた。本当は

アメリカンが飲みたいところだが無いものは仕方ない。

茶を入れるのに茶葉とかが少し？犠牲になったが、それは仕方ない。名誉の戦死だ。

並べられた茶に秋本が口をつける。。一口飲むと、形容しがたい苦味が舌を襲った。秋本は何とかぎこちない笑顔を作ると茶托に戻し、それきり口をつけようとはしなかった。

同じく茶を飲んだ明良が、勢い良く茶を噴出したのはいうまでもなかった。

「うぇっ、まずっ。…すいませんね、慣れてないもんで。わざわざ来てくれたのに何も出せなくて申し訳ない。」

そういって明良は頭を下げたが、秋本は気にしてはいないようだった。

他愛ない世間話が続いた。今流行りの歌舞伎なんかの話題を振られても、全くわからなかったので適当に流していたが。

『早く帰らねぇかな…』

そんなことを思っていると、唐突に話題が変わった。

「時に、黒崎殿はかなりの腕だとお見受けしましたが、どちらの流

派をお遣いになられるのでしょうかな？」

秀次郎の目が、すっと細くなる。狐のようだと、明良は思った

「え、いやまあ、剣はつかえないんで。どこのって言われても。」

「ほう？奥村道場では随分と派手な大立ち回りをされたと聞きましたが？」

その言葉に、いままで飄々としていた明良の雰囲気が、鋭いナイフのように変わった。

「何が言いたい。」

今までの経験からして、此奴は危険だと頭の中で警鐘が鳴る。

「そんな怖い顔をしないでくだされ。某はそのことを責めているわけではござらぬ。」

「……」

「あまり、派手な振る舞いはされぬほうが身のためにございますよ。これは忠告で御座る。」

「へえ？それは脅しとも取れるぜ？」

明良の唇が弧を描く。だが、眼は全く笑っていない。狼が牙をむくように、笑った。

「どう取られても結構です。忠告は致しましたぞ。」

そう言うと、秀次郎は己の差料を持ち、立ち上がった。もう話すことはないとの意思表示だった。

「……ひとつだけ言っておくが。」

「……？」

呟かれた低い声に、居間を出ようとしていた秀次郎が足を止めた。

「この家の人間に、つまんねぇ事しやがったら、あんたを殺す。必ず。」

殺気が、秀次郎の背に叩きつけられる。

「失礼致す。」

若い武士は、まるで何事もなかったかのように、その場を後にした。

明良は、その背が消えた後もにらみ続けていたが、やがてその肩が震えはじめた。

「くくくっ…あはははは…随分と食えねぇやつじゃねぇか。いいねぇ。面白そうだ。」

くつくつと笑う明良の姿は、兵士だった頃の姿に戻っていた。

其の眼は、ぎらぎらと飢えた獣のように光っていた。

挿話2

「ただいま帰りましたー。黒崎殿、お土産ですよー。」

夕暮れに差し掛かった頃、玄関から孝之介の元気な声が聞こえてきた。最近までのよそよそしい態度はどこへやら、今ではすっかり明良に懐いていた。

「ふあああ、あ、おかえり。遅かったな。」

居間では明良が座布団を枕がわりにしてゴロゴロと寝転がっていた。

「母上のお話が中々終わらなかったので…って黒崎殿、今日一日何をしていたのですか？」

「見りゃわかんだろ。寝てた。」

「…寝てばっかりいるとお尻に根っこが生えてしまいますよ？」

しれっと言う明良に、孝之介は呆れたように言う。

「はいはい。あれ？ビッグマザーは？」

「は？」

「せつさんは？」

「ああ、お隣へ。お裾分けに行きました。直ぐに帰ってきますよ。」

ふーん。と気のない返事を返し、お土産って何ー？と起き上がりつつ聞く。

「きんつばです。上方から来たお菓子らしいですよ…ってあー！！！」

箱を開けると、丸い焼き菓子が丁寧に並べられていた。表面には菓子店らしき名前の焼印がされている。

孝之介の説明を聞く前に、既にきんつばはモリモリと食われていた。

「うまいな。これ。」

「ちょっと！！ダメですよ！！お茶請けに出すんですから！」

「いーだろ。何時食っても一緒だよ。食えるときに食えっていうだろ？」

ぎゃあぎゃあと騒がしい二人の間に、静かな、しかし凛とした声が割り込んだ。

「ただいま帰りましたよ。二人とも。」

「オカエリナサイデゴザイマス！」

即座に明良が正座で出迎えた。その変り身の速さに、孝之介はため息をつく。

「留守番ご苦労様でございました。来客などはございましたか？」

「いいえ？誰も。」

明良は笑顔で嘘をついた。

秀次郎が来たことを言うつもりはなかった。貰った手土産も、何が混入しているかもわからないので、開封する前にすぐに棄てた。安藤家の人間を危険に晒すわけにはいかなかった。

「勇志郎はまだ帰っていないのですね。」

「ああ、まだ帰ってきていないですね。」

「兄上が帰るまで、きんつば、食べないでいようと思ったのに…」がっかりしたような孝之助の声に明良は慌てた。

「悪かったってば、もう食わないって。」

何気ない会話が、明良にとっては新鮮であり、遠い昔の記憶を蘇らせる。

『おかえり、なんて言うの、何時以来だろう。』

昔は、言われる側だった。雪人がいなくなってからは、そんなこと

もなくなった。

「行ってきます」と言って、還ってこない奴も沢山見てきた。

だから、何も言わなくなった。

死ぬのも、生きて帰るのも、彼らには同じ事だった。生きて帰ってもまた次の戦場へ送り出されるだけだからだ。

「二人とも、遅くなりましたが夕餉にしますよ。お隣から鯵を頂きましたから、おかずにしましょう。さあさあ、見ていないで手伝いなされ。」

追い立てられるように、二人は台所へ行った。

『この家族も、ホントお人好しだよな。』

大根を洗いながら、明良は思った。

『このまま私がここにいると、迷惑をかける事になるだろうな…』

――――いつ、ここを出ようか…――――

漸く得た居心地の良い居場所だった。

温かい寝床と、食事もある。そして何より、ずっと忘れていた家族の温もりを感じることが出来た。

彼らには本当に感謝してもしきれないほどだ。だが、恩人を危険にさらすわけにはいかない。

笑顔で話しかけてくる孝之介を見ると、チクリと胸が痛んだ。

勇志郎の受難1

（…何故こうなったのだろうか……？）

勇志郎は、煌びやかな提燈の灯かりの中、女達の甲高い嬌声を聞きながら、途方にくれていた。

数時間前――――

勇志郎は、今日の日雇い仕事を終え、出先から自宅へ帰ろうとしたときだった。

「安藤？！安藤勇志郎ではないか！」

後ろからいきなり声を掛けられ、驚いて立ち止まる。

振り向いてみると、勇志郎より大分背の高い武士が、にこやかな笑みを浮かべて声をかけている。

がっしりとした体つきと、それに見合った厳つい顔だが、笑うと意外と人懐こい顔である。

勇志郎には、最初誰だか思い出せなかった。

「えっと、失礼だが…」

目を白黒させて相手を見ていると、相手は苦笑した。

「おいおい、忘れたのか？わしだ、寅之助だ。」

「あ！山内殿！？」

「やっと思い出してくれたか。といっても十二年ぶりだからな！無理もない。」

山内寅之助とは、勇志郎が昔通っていた私塾で出会った。

当時にしては珍しく、儒学だけではなく算術も教えてくれる私塾だった。

勇志郎自身、剣術より学問のほうが好きだったが、寅之助はその逆だった。

見るからに逞しい、恵まれた体躯はじっと座っていることよりも、相手を竹刀で叩きのめすほうが性に合っているのだった。

そんな正反対で年も違う二人だったが、寅之助はそんなこと気にもせず、良く勇志郎を遊びに誘っていた。

「あのころは随分とおぬしに世話になった。先生よりも、おぬしに教えてもらったほうが分かり易かったものだ。」

「そんなことありません。私も苛められていた時、良く助けてくれたではありませんか。」

歩きながら、二人は昔話に花を咲かせた。

「そうだ！これから飲みに行かぬか？」

「え？でも…」

「久しぶりに会ったのだ。いいであろう？」

「え、ええそうですね。いきましょうか。」

勇志郎は正直乗り気ではなかったが、なかなか許してくれる雰囲気ではないようだ。昔から少々強引なところがあったが、なぜか憎めない男であった。

寅之助は豪快に笑うと、さあ、いくぞと、さっさと前を歩いていった。

（また、母上に小言を食らうであろうな）

内心で溜息を吐きながら、早歩きで寅之助を追った。

勇志郎の受難2

「兄上、遅いですね。」

夕餉の膳を前にして、孝之助がポツリと呟いた。

勇志郎はまだ帰ってこない。普段なら既にともに夕餉を取っている時分だった。

「仕方がありませんね。孝之助、早く食べてしまいなさい。黒崎殿も。このままではいつになっても片付きませんよ。」

いつものように冷静なせつだったが、やはり長男が心配なのか、時々玄関のほうに視線をやりながら、目の前の膳に手をつけていなかった。

一応、勇志郎は二十歳を超えた成人男性だ。いい歳した男なんだから、そんなに心配しなくてもいいんじゃないか。と明良は思ったが、つい最近暴漢に襲われ、殺されそうになっていたのを思い出した。それを助けたのは自分だったが。

（なんつーか、あいつはどっかトロいって言うか、抜けてるところ

があるからな。）

この数週間、勇志郎と生活して分かったことは、

お人好し。

書物を読むのが趣味。

身体能力は低め（肉体労働は苦手だと言っていた。）

ということくらいだった。あと、運が悪いことも追加しておいたほうがいいだろう。出掛けると大体鳥のフンをつけられる。何もしていないのに破落戸に絡まれる。

今まで接してきた男達とは全く間逆のタイプだ。

（多分女にはモテないだろうな。典型的な「いい人なんだけど…」みたいな感じで終わるタイプだ。面はまあまあイイんだろうが…もったいない奴。）

心の中でボロクソに酷評している明良だが、あのへにゃりとした笑顔を向けられると、どんなに怒っていても、たちまち毒気を抜かれてしまう。ある意味才能だと明良は思う。

しかし、そんなヤギみたいな草食動物の勇志郎だが、慣れない過酷な肉体労働で家族を養うために日銭を稼ぎ、泥のように疲れて帰ってくるのを見て、居候である明良は本当に申し訳なくなるのだ。ある日、見かねて自分が代わりに行くと申し出ると、勇志郎は頑としてこれを受け入れなかった。

「女子である明良殿に、あのような仕事をさせるわけには参りません！」

と言ってにべもなく断られた。

明良は見た目より結構ガッツがあるところが気に入っていた。か弱い女扱いされたところには多少むっとしたが。

（途中でくたばってんじゃねぇだろうな。）

もやもやと、そんなことを思いながら、目の前の膳に箸を伸ばした。

勇志郎は、酒が弱い。

いつも猪口一、二杯で色白の顔がみるみる真っ赤に染まるほどだった。

昔、１８，９歳のころ、悪い先輩に無理矢理盛り場に連れて行かれ、酒を飲まされ、ぶっ倒れたことがあった。

銚子一本飲んだか飲まないかと言うくらいだった。

酷い頭痛で起きると、見たことの無い部屋とけばけばしい色の布団に寝ていたのだった。脇ではものすごく不機嫌そうな見知らぬ女が自分の世話をして居た。

先輩は勇志郎の世話を放棄して馴染みの女の元へ行っていた。恐縮して身支度をする自分がなんだか情けなかった。

それ以来酒には十分注意しようと決めていた勇志郎だったが。

勇志郎は今、深川の小さな酒場に居た。寅之助の行きつけだと言うこの店は、小さいがなかなか小奇麗だ。

出てくる器も店主の趣味なのか、なかなか洒落ていて、肴も美味かった。

「再会の祝いだ。まあ飲め！」
ずいっと銚子を向ける寅之助に慌てて杯を差し出す。

「は、はい、いただきます。」
注がれた酒を舐めるようにちびちびと飲む。いつまでたってもこの腹の底がかあっと熱くなるのはなれない。

「どうだ？いい店だろう？」
寅之介は厳つい顔に人懐っこい笑顔を浮かべた。
普段、無表情の時は人が避けて通りそうなほど怖い無骨な顔だが、笑うと途端に少年のようになり、
その笑顔を向けられれば大抵の女は夢中になってしまう。

「はい。料理もとても美味しいですね。」
蕗の青煮を口に運び、幸せそうに笑った。
それを見て寅之介がぷっと吹き出した。

「お前さんは、昔から、本当に美味そうに飯を食うよなぁ。」

「そうですか？自分では見られないので分りませんが。」

「いやいや、気にするな。」
そう言って寅之介は杯を呷った。

そういえば、明良にも以前同じようなことを言われた。
『お前、すっげえ幸せそうに飯食うんだな。』
と苦笑された。
自分では特に気にしたことはなかったが、2回もそう言われると何だか気恥しくなった。

他愛の無い話に花が咲き、3杯ほど杯を重ねた勇志郎は、だいぶ酔いが回っていた。

「そう言えば、お主、こっちの方はどうなんだ？」
悪戯っぽい笑みを浮かべた寅之介は、太い小指を立てて聞いてきた。

「こんな貧乏御家人に、好き好んで来る女子なんていませんよ。それに私はそういうのが苦手で…」

それを聞いた寅之介は唐突に立ち上がった。

「それはいかん！お主まだ二十代だろう？そんなことではあっという間に爺になっちまうぞ！よし！親父、勘定は置いておく！行くぞ！勇志郎！」

「へい。毎度。」

「え！っちょっと！どこへ行くのですか！？」

「野暮なことを申すな。この世の極楽浄土へ行くのだ。男と生まれたからには、一度は吉原の地を踏んでおかないと、死ぬとき後悔するぞ。」

「そんなこと言ったって…山内殿ー！」
半ば引き摺られるようにして、勇志郎は店を後にした。

勇志郎の受難３（途中）

（マジであいつ、行き倒れてんじゃねえか？）

夕餉はとっくに終わっているというのに、一向に帰ってくる気配がない。遅くなるときは必ず一言言ってから出掛けていた。

せつは何時もどおりに、行灯の明かりで繕いものを始めていたが、目だけは忙しなく玄関の方を見ていた。

（携帯が無いのがこんなに不便だと思わなかった。）

食後のトレーニング（腹筋３セット）をしていた明良だったが、なかなか集中できない。

（あいつもいい歳した男だ。帰りが遅いからってどうってことないじゃねぇか。）

無理やり思考をシャットダウンしようとしたが、辻斬りや強盗といった不吉な言葉が頭をよぎった。

「母上、少し兄上を探しに行ってきます。」

孝之介の言葉で明良は我に帰った。子供に夜道を歩かせるわけにはいかない。

「ああ、私が探してきますよ。せつさん。」

何か言おうとした二人を遮り、明良はさっさと身支度をする。

「女子が夜に一人で出歩くなど…」

否定的な意見を述べたせつだったが、その声はどこか弱々しかった。

「子供が一人で出歩くほうが危ないですよ。これでも私は結構頑丈ですから。じゃあ、行ってきます。」

「あ、待ってください黒崎殿！」

孝之介に呼び止められて、振り返る。

「外は冷えます。これを。」

深緑色の襟巻きだった。明良には馴染み深いシュマグの手触りに似ていた。

「サンキュ。」

受け取った襟巻きを、手馴れた様子で身に付けた。中東での作戦の時は随分とお世話になったものだ。

これがないと、全身が砂まみれになってしまうからだ。

「じゃ、行ってきます。」

外に出ると、息が白くなった。

「さむっ、これ借りて正解だったな。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9832i/

空のカケラ

2011年12月29日17時49分発行